

答えと考え方

別冊解答書



高校入試対策
総復習
これ1冊で

しっかりやり直せる

中学
国語

正答(もしくは模範解答例)として示している部分で()に入っている部分は、
そこを含んでいてもいなくても正答としてよいという許容範囲を示しています。

1 漢字の読み書き

発展問題

P 5

- 1 なめ (2) すべ (3) あらわ (4) いちじろ
- 2 (1) (順に) 適・滴・敵・摘 (2) (順に) 粗・祖・租・阻 (3) 測 (4) 囿 (5) 納 (6) 修 (7) 収 (8) 治
- 3 (1) ゆくえ (2) かわせ (3) いなか (4) こいち

1 送りがなに着目して読み方を考える。 (3) 「著す」は、書物を書き記すという意味。

2 形の似た同音異字や、同訓異字には注意が必要である。同訓異字は、その漢字を用いた二字熟語を考えることで、区別がしやすくなる。「オサめる」の場合なら、「納税」「修業」「収穫」「政治」などの熟語を考えると、書き分けのヒントとなる。

3 熟字訓は、一語一語をしっかりと覚えていくしかない。「梅雨(つゆ)」「白髪(しらぎ)」などのように、通常の読み(ばい)うはくはつ)も可能なものは、文脈に沿ったふさわしい読み方を選ぶ必要がある。

完成問題

P 5

- 1 (1) かん (2) なご (3) こうたく (4) 嘗 (5) 枚拳 (6) 簡潔
- 2 ア
- 3 エ

1 (2) 「和」には、「なご(む)」の他に、「やわ(らぐ)」という訓読みもある。

複数の訓読みがある漢字は、送りがなに着目してその文に合った読み方を考える。

2 「織イ」の「イ」は、「維」。アは「維持」、イは「偉大」、ウは「違反」、エは「遺産」。

3 「キョウイ」には、「脅威」「強意」「胸囲」「驚異」などの同音異義語がある。「異」と熟語を作る漢字は、「驚」。

2 漢字の知識

発展問題

P 7

- 1 信 (1) ウ (2) ア (3) エ (2) ウ
- 4 (1) 四 (2) 五

1 「信」は、「人」+「言」の会意文字で、一度言ったことを通す人の行為を表す。他の漢字は、すべて象形文字。

2 (1) 「腹」の部首は「にくづき」。「つきへん」ではない。「にくづき」は、「肉」をもとにした部首で、人間の体の部分や、肉に関係する漢字に用いられる。

(2) 「あなかんむり」は「うかんむり」と間違えやすいので注意。

3 (1) ア、イ、ウ、オは五画、エは四画。 (2) ア、イ、エ、オは七画、ウは六画。イ「ト」の部分は、二画ではなく、三画。ウ「朽」の右部分は二画で書く。

4 (1) 「馬」の筆順は、「一」→「二」→「三」→「四」→「五」→「六」→「七」→「八」→「九」→「十」→「馬」。縦画を書いてから、横画を書く。(2) 「抜」の筆順は、「一」→「二」→「三」→「四」→「五」→「六」→「七」→「八」→「九」→「十」→「抜」。「友」の部分は、横画を書いてから、左払い。

完成問題

P 7

- 1 イ
- 2 I やまいだれ II 十二
- 3 イ

1 アは形声文字、ウ、エは象形文字。イ「初」は会意文字。「衣を作るはじめに、布を裁ち切る」意味を表している。

2 「痛」の部首は、「チ」(やまいだれ)。似た形の部首「疒」(まだれ)と間違えないこと。

3 「雑」の筆順は、「一」→「二」→「三」→「四」→「五」→「六」→「七」→「八」→「九」→「十」→「十一」→「十二」→「十三」→「十四」→「十五」→「十六」→「十七」→「十八」→「十九」→「二十」→「雑」となる。

3 熟語の知識

発展問題

P 9

- 1 (1) 工 (2) ウ (3) ア
- 2 (1) 巻↓貫 (2) 特↓得
- 3 (1) 好転 (2) 湿潤 (3) 親善 (4) 手段

- 1 (1) 「尽力」は「力を尽くす」だから、下の字が上の字の目的・対象になっている熟語。(2) 「貯」も「蓄」も「ためる」という意味。(3) 「判断力」は、「判断」する「力」ということ。二字＋一字に分解できるのは、ア。
- 2 (1) ここでの「いっかん」は、「初めから終わりまで貫かれている」という意味。(2) 「自らの業(悪いことの報い)を、自ら得る」という意味。
- 3 (1) 「悪くなる」の反対は「良くなる」。この意味にあてはまるのは「好転」。(2) 「乾く」の反対は「潤う」。この意味にあてはまるのは「湿潤」。(3) 「友好」とは、「仲良くする」ということ。(4) 「段」という漢字には、「やり方」という意味がある。

完成問題

P 9

- 1 ウ 2 ア 3 絶体絶命 4 先(天的)

- 1 「輩」は、「仲間」の意。「先輩」とは、「先に入った仲間」という意味だから上の字が下の字を修飾している熟語である。これと同じ組み立てなのは、ウ「商船」(商いの船)。
- 2 「均」「等」ともに、「ひとしい」という意味。似た意味の漢字を重ねた熟語は、ア「温暖」(温かい＝暖かい)。
- 3 ここでは「追いつめられた状態に置かれている」という意味の四字熟語がふさわしい。「**絶体絶命**」は、書き間違いの多い四字熟語。「絶対」ではないので注意。

- 4 「後天的」とは、「生まれた後に備わる様子」のこと。これと反対の意味をもつ言葉は「先天的」。「生まれつき備わっている様子」を表す。

4 書写(行書・楷書)

発展問題

P 11

- 1 ウ・エ
- 2 (1) 八(画) (2) 十(画) (3) 十三(画) (4) 十(画)
- 3 (1) イ (2) ウ (3) ア

- 1 **楷書とは、はね・はらい・とめで一つの画を終え、それぞれの画を連続させたり点画をくずして書いたりしない字体のこと。**漢字によっては、行書と楷書とあまり形の変わらない部分もあるので、細部までよく見ることに。
- 2 (1)は「ネ」の部分、(2)は「走」の部分、(3)は「ネ」の部分、(4)は「米」の部分の省略に注意。
- 3 (1)は、「さんずい」を正しくくずしたものを選ぶ。アは「情」、ウは「精」の行書。(2)アは「護」、イは「穫」の行書。イは「のぎへん」である。(3)イは「録」、ウは「縁」の行書。

完成問題

P 11

- 1 (点画が省略された漢字) ア・(総画数) 十二(画) 2 ウ
- 1 アは、「のぎへん」の五画目が省略されている。
- 2 「程」は十二画。楷書で書くと、アは「夢」、イは「想」、ウは「雲」、エは「愛」。総画数は、ア・イ・エは十三画、ウのみ十二画。したがって、正解はウ。

5 言葉の意味と使い方

発展問題

P 13

- 1 イ 2 (1) ア (2) ウ 3 (1) ア (2) エ

1 文脈をしっかりとらえて、意味を考えること。「人の上に立つ」は、「足を伸ばしてある場所に立つ」という意味ではなく、「重要な役目に自分の身を置く」という意味。これと同じ意味で用いられているのは、イ。

2 (1) 「にわか」は、「物事が突然起こる様子」のこと。(2) 「おしなべて」は、「いちように・概して」という意味。

3 (1) 「鼻をあかす」とは、「人を出し抜き、あつと言わせる」という意味。(2) 「板につく」は、「経験を積むことで、動作や様子が、その地位や職業などにしっくりと合う」という意味。

完成問題

P 13

- 1 ア 2 ウ 3 I 足 II 目

1 「明るい」は多義語。「光が十分にある」「朗らかで陽気だ」などの意味もあるが、ここでは、「その方面によく通じている」という意味。

2 「なおのこと」は、「なお」をさらに強めた言葉。「なおさら・さらに・よりいっそう」という意味。

3 体の一部を使った慣用句は数が多い。文脈をしっかりと読み取り、適切な語を考えること。「足を引っ張る」は、「仲間の成功や前進などをじゃまする」という意味。「目にも見せる」とは、「ひどい目にあわせて思い知らせる」という意味。

6 敬語の種類

発展問題

P 15

- 1 (1) (順に) 召しあがる・いただく
(2) (順に) おっしゃる・申す(申しあげる)
(3) (順に) いらっしゃる・まいる
(4) (1) です (2) 存じ(存じあげ) (3) お支払いになる
(4) うかがい(まいり)

1 尊敬表現、謙譲表現は、それぞれ一対ずつ合わせて覚えておくことよい。ここで挙げたもののほか、「する↓(尊敬) なさる(あそばす)・(謙譲) いただきます」「行く↓(尊敬) いらっしゃる・(謙譲) うかがう(まいる)・参上する」などを覚えておこう。

2 (2) 「存ずる(存じあげる)」は、「思う」の謙譲語でもある。(4) 「うかがう」は、「聞く」の謙譲語でもある。(例) にある「見る」は尊敬語になると「**ご覧になる**」。

完成問題

P 15

- 1 いただき 2 くださった 3 なさった(された)・あそばした

1 「もらう」の謙譲語は「いただく」、または「ちょうだいする」。

2 「与える・やる・くれる」の尊敬語は「くださる」。謙譲語は「差しあげる」「担任の先生に」という文脈であれば、自分が手紙をあげたことになり、「差しあげた」と表現する。

3 「する」の尊敬語は「なさる(あそばす)」。尊敬の助動詞を使った「された」でも正解。

7 敬語の使い方

発展問題

P 17

- ① いただいた(頂戴し) ② いらっしゃる ③ いただき(頂戴し)
- ① うかがった ② おかきになる ③ 申しあげ ④ 拝見し

1 敬語表現の表し方にはいくつかの方法があるが、ここでは「一語の動詞」で答えなければならないことに注意する。(1)(3)は自分の動作なので謙讓語に直す。(2)はおお客様の動作なので尊敬語に直す。

2 敬語を使う場合は、誰に対する敬意なのか、動作主は誰なのかをしっかりと見極めなければならない。 ①の動作主は「自分(中村)」なので、ここでは謙讓語を選ぶ。②「かく」の動作主は「田中さん」したがって、尊敬語を選ぶ。③動作主は「自分(田中)」したがって、謙讓語を選ぶ。④動作主は「自分(中村)」したがって、謙讓語を選ぶ。

完成問題

P 17

- 1 ウ
- 2 B・E

1 アは「どうぞ、あちらの方でお聞きください。」、イは「父が出張先から帰ってまいります。」、エは「お客様がこのようにおっしゃっていました。」が正しい。

2 「鑑賞するときは大切です。」は、「館長さん」の言葉。したがって、Bで謙讓語の「申し」を使うのは間違い。正しくは「おっしゃいました」。また、Eで自分(わたし)の行動に、尊敬語「ご覧になり」を使うのは間違い。正しくは「拝見し」。

8 言葉の単位(文節・単語)

発展問題

P 19

1 猫は足音を立てずにひっそりと歩くことができる動物だ。気配を殺して獲物に近づきタイミングを見計らって一気に飛びかかるのだ。単独で狩りを行う動物だからそのハンティング能力は抜群である。

- 2 (1) × (2) ○ (3) ○ (4) ×
- 3 ウ

1 意味内容のまとまりに着目して考える。

2 ①「消しました」は、一つの文節。②「持っていく」の「いく」は上の語を補助する独立した一つの文節である。③「大好きなのだ」は、一つの文節。④「遠くから」聞こえたようだ」は、どちらも一つの文節。**3** 「高く」は形容詞の連用形。「昇って」は「昇る」という動詞の連用形「昇つ」(音便になっている)と接続助詞の「て」。

完成問題

P 19

- 1 むろん一君が一行とは限らない。
- 2 (1) 四 (2) 五
- 3 (1) 九 (2) 八 (3) 八 (4) 十 (5) 十一

1 「行くとは」は、一つの文節。「とは」だけでは意味がわからないので「行く」とは」のように区切ることはできない。「限らない」も、一つの文節。**2** 文節に分けると、(1)「魚に軽く塩を一ふった。」、(2)「あまり寒いのでセーターを一買って一しまった。」となる。

3 それぞれを単語に区切ると、(1)「部屋」に「はまだ」荷物「が」残っ「て」いる。、(2)「背中」と「首」に「激しい」痛み「を」感じる。、(3)「太陽」が「ぎらぎら」輝い「て」いまし「た。」、(4)「明日」から「自動車」の「展示会」が「開か」れる「と」いう。、(5)「母」は「機嫌」の「いい」顔「を」し「て」い「た。」となる。

9 主・述の関係

発展問題

P 21

- 1 (1) ○ (2) × 2 ① 父が ② 私は ③ 犬は
- 3 (1) 問い合わせたが (2) 私も

1 (1) 「撮影場所は―海だ」で、「何が―何だ」の型の主語と述語の関係。
 (2) 「思う」の主語は、「星」ではなく、この文の書き手(「私」など)。「は」
「が」が付くものがすべて主語であるとは限らない。

2 主語と述語の関係を抜き出すと、①「父が―置いた」、②「私は―確認したが」、③「犬は―いなかった」となる。②「確認した」のは、文頭にある「私」
 このように、**主語と述語が離れている場合は要注意。**

3 (1)の「キャブテンが」に対応する述語は「問い合わせたが」。「不明だった」
 に対応する主語は、文に示されていないが「試合日程は」となる。(2)の「立
 候補した」に対応する主語は、「私も」。

完成問題

P 21

- 1 (1) 人が (2) 花が 2 (1) 克久が (2) 呼ぶ

1 (1) 述語「減らない」に対応する主語は、「(冬物コートを着た) 人が」。
 「減らない」のは「街を行く人」でも「寒い日」でもない。(2) 述語「咲
 いた」に対応する主語は、「(大輪の)花が」。「どのように」ではなく、「何が」
 咲いたかと考えてみる。一文節で書き抜くので、「花が」の部分だけでよい。

2 (1) 「克久が―経験した」内容が、―線②からあとで述べられている。
 (2) 主語「大人が」に対応する述語は「呼ぶ」。「大人が―呼ぶ」の部分が、
 「混乱」の説明になっている。このように、**一つの文に複数の主語と述語
 がからみあう文は、読解のうえでも注意が必要である。**

10 修飾・被修飾の関係と連文節

発展問題

P 23

- 1 (1) ○ (2) × (3) × 2 (1) 読んだ・ア (2) 風が・イ
- 3 (1) かわいいシールを 私の妹は 何枚も持っている。
 (2) 子供の頃の写真が 兄の机の引き出しから 出てきた。

1 (2) 「電化製品など―なかった」は、主・述の関係。「(昔の)家庭には」が、
 「なかった」と修飾・被修飾の関係である。(3) 「ものすごいスピードで」、
 「ものすごい」スピードで―走る」が、それぞれ修飾・被修飾の関係。

2 (1) 「図書館で」が修飾しているのは、用言を含む文節「読んだ」である。
 (2) 「暖かい」が修飾しているのは、体言を含む文節「風が」。

3 (1) 「何枚も持っている」が述部。主部は「私の妹は」。また、述部を修
 飾しているのは、「かわいいシールを」。「妹は―持っている」という文に、
 説明を加えていったと考える。

(2) 「出てきた」が述部。主部は「子供の頃の写真が」。また、「出てきた」
 を修飾しているのは「兄の机の引き出しから」。「写真が―出てきた」とい
 う文に、説明を加えていったと考える。

完成問題

P 23

- 1 いなかったら 2 (1) ウ (2) イ (3) エ (4) ウ

1 文節に区切ると「もし―あの一時―彼が―いなかったら―一町は―どう―な
 っ―て―いた―だろう。」となる。「もし」を下に続く**一文節ずつに対応させなが
 ら、自然な形で意味がつながる文節を見つけよう。**

2 (1) 「イ」得られない」を修飾しているのではない。(2) 「更に」「注意を」
 「ピアノ」に、すべて「集中して」を修飾している。また「二度」と「(そ
 の)音を」は、「聞き漏らすまいと」を修飾している。

11 並立の関係と補助の関係

発展問題

P 25

- 1 (1) × (2) × (3) ○ 2 (1) ○ (2) × (3) ○
3 (1) 海や山へ (2) 忘れてしまった (3) 見てみように――。

1 「父は」はこの文の主語、「妹に」は「した」の修飾語である。(2) 「明るい」と「希望に」は、修飾・被修飾の関係。(3) 「文化祭も」と「運動会も」が、対等に並んでいる。この二つを**入れ替えて**、「運動会も文化祭も」としても意味は変わらないので、両者は並立の関係。

2 この「いる」は、「そこに存在する」という本来の意味で用いられている。また**補助の関係では、文節と文節の間に別の文節をはさみこむことができない**が、ここでは「庭に犬がいる」としても意味が通じる。(3) 「ない」は、ここでは「存在しない」という意味ではなく、すぐ上の「うまい」という形容詞に否定の意味を添えているので、補助形容詞である。

3 (1) 「山や海へ」と入れ替えても意味が変わらない。(2)(3) 補助的な意味を添える語は「いる」や「ある」だけではない。

完成問題

P 25

- 1 (1) エ (2) イ (3) ウ 2 イ

1 (1) 位置を入れ替え、「さわやかで軽い味わい」としても意味が変わらない。(2) 「イギリスの」が、続く文節(「詩集を」)の内容を詳しく説明している。(3) この「くれる」は、本来の意味が薄れた補助動詞。

2 「初めての」外国語を「は、初めての」が、下の文節(「外国語を」)を詳しく説明しているので、修飾・被修飾の関係。アは、「発音も」と「文法も」が対等に並んでいるので、並立の関係。イ「新鮮な」が、「驚き」の内容を詳しく説明しているので、修飾・被修飾の関係。ウ「きた(くる)」は、本

来の意味が薄れた補助動詞。よって、補助の関係。エ「納得が―ゆくように」は、「何が―どうなる」という主・述の関係。

12 自立語

発展問題

P 27

- 1 (1) ○ (2) × (3) ○ (4) ×
2 (活用する自立語) ある・行く・考え・買った
(活用しない自立語) 私・父・さつそく・近所・園芸店・しばらく・小さな・花・種

1 **自立語は文節のいちばん初めに置かれ、一つの文節に必ず一つだけ含まれる。**(2) 「元氣 そうに」で一文節で、「そうに」は付属語(助動詞)。(4) 「られ」は、付属語(助動詞)。

2 **まずは文を文節に分け、その文節から一つずつ自立語を探す。**「ない」「ます」「ば」などの語を付けて形が変化するものは「活用する自立語」。

完成問題

P 27

- 1 ア 2 ア

1 単語に分けると「明日―は―一雨―が一降る―だろ―う」。このうち、自立語は「明日」「雨」「降る」の三つ。「明日」「雨」は名詞で、活用しない自立語。「降る」は動詞で、活用する自立語。「だろ―う」は、「だろ」(助動詞「だ」の未然形)+「う」(助動詞「う」)。

2 「使えない」はこれで一つの文節であり、「使えない」と二つに区切ることはできない。つまり、この文節では、いちばん初めに置かれている「使え」が自立語、「ない」が付属語(助動詞)ということになる。ア「しない」の場合も同じく、「し」が自立語、「ない」が付属語(助動詞)。一方、イ、ウを文節

ごとに区切ると、イ「なれる」ものではない、「ウ」自信が「ない」となり、「ない」は単独で文節を作っているから、自立語（形容詞）。エ「あどけない」は、これ一語で形容詞。

13 用言

発展問題

P 29

- 1 (1) 飛ぶ・ア (2) 下手だつ・ウ (3) 痛い・イ
 (4) し・ア (5) 欲しい・イ
- 2 (1) 動詞 (2) × (3) 形容動詞 (4) 形容詞 (5) ×

1 各文節のいちばん初めにある自立語を見つけたら、「活用できるかどうか」によって用言を探し出す。品詞の識別は、言い切りの形に着目する。(4)は、「連絡を「します」と文節に分けることができるので、「し」が自立語だとわかる。「し」の言い切りの形は「する」。「ウ」段の音なので、動詞である。

2 (1) 言い切りの形は「信じる」。「ウ」段の音なので、動詞。(2) 「自宅だ」は、「自宅な人」などと活用できないので、名詞「自宅」+助動詞「だ」。(3) 言い切りの形は「ゆかいだ」。よって、形容動詞。(4) 言い切りの形は「危ない」。よって、形容詞。(5) 「おかしな」が、(3)の「ゆかいな」と異なる点は、「おかしだろ(う)」「おかしだつ(た)」のように活用ができないということである。つまり、「おかしな」は活用しない自立語(連体詞)。

完成問題

P 29

- 1 (1) イ (2) イ (3) ア

1 (1) ア〜エの「終わり」はすべて動詞のように思えるが、イのみは、「終了」という名詞に置き換えることができる(「もう練習は終了です」)。イの「終わり」は、動詞から転成した名詞(転成名詞)。このような**転成名詞は数**

も多く、文中では用言と間違えやすいので注意が必要。その他の転成名詞には、「考え↑(考える)」「笑い↑(笑う)」などがある。(2) それぞれ、言い切りの形に直して考える。アは「不幸だ」、イは「寂しい」、ウは「不思議だ」、エは「残念だ」。イのみが形容詞、残りはすべて形容動詞となる。(3)のアは名詞。残りはすべて形容詞。

14 用言の活用

発展問題

P 31

- 1 (1) 下二段(活用)・ウ (2) 五段(活用)・イ
 (3) 上一段(活用)・オ (4) サ行変格(活用)・ア
- 2 (1) おだやかに・連用(形) (2) 明るかつ・連用(形)
 (3) 正しい・連体(形)

1 動詞の活用の種類は、「ない」を付けて考えるとよい。(1)「集め(ない)」となり、直前の音が「エ」段なので、下二段活用。(2)「洗わ(ない)」となり、直前の音が「ア」段なので、五段活用。(3)「足り(ない)」となり、直前の音が「イ」段なので、上一段活用。(4)「する(―する)」は、サ行変格活用。

2 (1)「おだやかに」は、形容動詞「おだやかだ」の連用形。(2)「明るかつ」は、形容詞「明るい」の連用形。形容詞の連用形には「かつ・く・う」という三つの形がある。(3)形容詞「正しい」の連体形。

完成問題

P 31

- 1 エ 2 イ 3 ア

1 「うれしい」は形容詞。ここでは「知らせ」という体言に続いているので、連体形ではないので注意する。ア「暑い」は、形容詞の終止形。イ「にぎやかだ」は、形容動詞の終止形。ウ「描い」は、五段活用動詞「描く」

の連用形。**五段活用動詞の連用形に「た」や「て」が続くときは、このように音便変化する。**ここでは本来の形である「描き」が「描い」に変わっているのが、イ音便。工「元気な」は、形容動詞「元気だ」の連体形。

2 「答える」に「ない」を付けると「答え(ない)」となり、直前の音が「エ」段なので、下一段活用。この「答え」は、助詞「て」が続いているので連用形。

3 線部「見(る)」に「ない」を付けると「見(ない)」となり、直前の音が「イ」段なので上一段活用。「見る」は、語幹と活用語尾の区別がない動詞である。「着る」「煮る」(上一段活用)、「出る」「寝る」(下一段活用)なども語幹と活用語尾が区別できないので覚えておこう。ア、工のうち、上一段活用はア「煮(た)」。イ「書い」は、五段活用の連用形。ウ「し」は、サ行変格活用の連用形。工「来」は、カ行変格活用の連用形。

15 付属語

発展問題

- 1 ① ア ② エ 2 (1) だ (2) れる (3) せる (4) め

P 33

1 ① 「思ったより」は、これで一つの文節。自立語であれば、文節のいちばん初めに置かれるはずだから、この「より」は付属語の格助詞で、比較を表す。ア「和食より」も、「和食より」とは区切れないから、①と同様に付属語の格助詞。イ「よりつく(寄りつく)」は、動詞。ウは「みんな」より「よい」と区切ることができる。この「より」は副詞。工「腕に「よりを」と区切ることができる。この「より」は名詞。

2 文節「家に」は、「帰る」の修飾語となっている。この「に」は付属語で、帰着点を表す格助詞。アは「荷が重すぎる」で、名詞。イは形容動詞「大切だ」の連用形。ウも同じく形容動詞「残念だ」の連用形の活用語尾。工は、②と同様に付属語の格助詞で場所を示す。

2 (1) 「だろ」は、断定の助動詞「だ」の未然形。(2) 「しかられて」は単

語に分けると「しかられ」て。したがって、「れ」は「られる」ではなく「れる」が終止形。受け身の助動詞である。(3)は使役の助動詞「せる」。(4)は、打ち消しの助動詞「ぬ(ん)」。

完成問題

- 1 (1) ウ (2) イ (3) ウ 2 ア

P 33

1 (1) 例文の「が」は、すべて格助詞。**助詞は、文節どうしの関係を表したり、さまざまな意味を添えたりする働きをする付属語。**ここでは、格助詞「が」によって、前後の文節がどのような関係になっているかを考える。ア、イ、工は、「が」によって前後の文節(連文節)が**主・述の関係**になっている。ところが、ウの場合、「好き」なのは話し手(私)であり、「あなた」ではない。つまり、ウの「が」は主語ではなく、**対象を表す格助詞**である。

(2) 前後の文節(連文節)の関係から、助詞「と」の働きの違いを見極める。ア・ウ・工の「と」は、その前を「」でくくることができる。

ア 風が「もうすぐ秋だよ」と言っているようだ。

ウ 「あきらめなくてよかった」と、思った。

工 私は、「まだ大丈夫だ」と励ました。

つまり、これらの「と」は、**引用を表す格助詞**。イの「と」は、読点「、」の前後をつなぐ働きをしているので、**接続助詞**である。

(3) 助動詞「そうだ」は前の用言の活用形によって意味が変わる。**終止形+「そうだ」なら伝聞、連用形+「そうだ」なら推定(様態)**の意味である。

ウの「おいし」は「おいしい」という形容詞の語幹。形容詞や形容動詞の場合は連用形ではなく、「語幹+そうだ」で推定(様態)の意味になる。

2 「卓球だ」の「だ」は、「卓球である」と置き換えることができる。また、体言に接続していることから、断定の助動詞だとわかる。同じように「である」に置き換えられ、断定の意味を表しているのは、ア、イ、ウの「だ」は、過去(完了・存続・想起)の助動詞「た」が濁音化したものである。工は、形容動詞「きれいだ」の一部。

16 話題をとらえる

発展問題

P 34

1 仮想（としての）サンタクロース。（）

1 まず、文章から**キーワード**となる語句をとらえる。全体を通して、「サンタクロース」「仮想」という**語句が繰り返されており**、この二語がキーワードであることがわかる。次に、キーワードの「サンタクロース」と「仮想」がどう結びついているかを読み取る。「サンタクロースが切実なのは仮想だからである」「それ（サンタクロース）は、完全な私たちでは現実化することのない仮想である」とあるので、サンタクロースが「仮想」であるという話題について述べられていることが読み取れる。

完成問題

P 35

1 (1) (植物を食べるうえで人間がもっている) 知恵 () (2) ウ

1 (1) この文章では、人間が食べる植物として「イモ」や「穀類」、「苦味のある植物の茎や葉」が挙げられている。そして、これらについて、「あく抜きのような**知恵**がないと食べられない」「穀類を食べるには**知恵**が要る」と述べられている。したがって、話題は「**植物を食べるうえで人間がもっている知恵**」であることがわかる。

(2) まず、各段落の内容をとらえよう。

①…イモを食べるにはあく抜き**の知恵が必要であり**、人類がイモを食べる技をもったこと**の意義はきわめて重要である**。

②…人間は、食べるのに**知恵が必要となる穀類や**、苦味のある植物の茎や葉も食べる。

③…人間は、他の動物が**食べない苦味成分を含む植物を愉しんで食べる**。したがって、これらをまとめると、「人間は他の動物は**食べない穀類や**

苦味のある植物を、人間の知恵で、あるいは独特の好みで食べる」ということ。これに合うのは、ウである。イは、「苦味を取り除く」が誤り。苦味も好んで食べるのである。

17 接続語に注意する

発展問題

P 37

- 1 (1) ウ (2) ア (3) ア (4) イ (5) イ
- 2 ① ウ ② ア ③ エ

1 (1) 先生の家の「玄関のチャイムを押し」て先生が「出て」くるのは、予想できる結果につながっているのだから、**順接**の関係である。

(2) 「勝利は絶望的かと思われた」から、「奇跡の追い上げ」へは、予想できることは逆の内容へとつながっているのだから、**逆接**の関係である。

(3) 「通信技術の発達は、地球を小さくした」ことの具体例として、「インターネット」での交流を挙げているのだから、例示して**説明**している関係である。

(4) 「英語が得意だ」ということに、「フランス語も話せる」ことを付け加えているのだから、**累加**の関係。

(5) 「すぐ出発する」と「しばらくゆっくりする」の二つから、一方を**選択**させる関係である。

2 ① 「地球にある空気も水も地球の中から出てきた」ということは驚くべき事実であるが、それに、「これらは地球の歴史の初めのころに、一度だけつくられた」という驚くべき事実を、さらに**付け加えて**いる。

② 「地球の問題を考えるとときには、地球全体を考える必要がある」理由は、すぐ前に書かれている。つまり、「地球は運命共同体」だからである。

この関係を考えると、**順接**であることがわかる。

③ 「地球という」財産を、人類のみで使い尽くしてしまう「こと」と、「地球全体の資産として未来のために生かす」ことの、どちらかから一方を**選**

扱させる形でつながっている。

完成問題

P 38・39

- 1 ① A ② イ ③ ウ ④ ア ⑤ ウ ⑥ イ
- 2 (1) A E B A (2) 2

1 ① 「生物どうしの関係」が「複雑である」ことは厄介なことであるが、そこに「多様な生き方が成り立つ」と新たな可能性を示しているので、逆接の接続語が入る。

② 少し前にある「自分は、人でも犬でもなく猫であることを表明している」ということと「自己紹介の文ではなくなる」ことは対立する関係なので、逆接の接続語が入る。

③ 「吾輩が猫である」と表現すれば、「(自分が、作中に登場する猫だという) 情報を知らせる文に変わる」ということを、「原文とは意味合いがずれてくる」と、わかりやすく言い換えている。

④ 「ホモ・ファール」を「道具を使う動物」と言い換えている。

⑤ 「補助的役割を果たしたにすぎなかった」道具(用具)と、「機械はちがう」と述べているので、逆接の接続語が入る。

⑥ 機械が道具と違う点について、「動かすのにも熟練を必要とする」ことに付け加えて、「他の動力によって仕事をすること」を挙げている。

2 (1) A 前段落では自然の中の暮らしについて考えているが、これ以降は話題が切り替わり、科学技術の中の現代社会について考えている。

B 自然と接する機会がほとんどなく、空調などで快適に暮らすためのエネルギーを「自然から取り出したもの」から得ている私たちの生活を、「自然は利用するだけのものになっている」と、わかりやすく言い換えている。

(2) 挿入する文章には「毎日の生活に疲れたときには山や海に行って」とあり、自然から離れて暮らす人びとのことを述べているとわかるので、「都会生活を快適と思う人びとも」の一文につながるのがふさわしい。

「自然は克服するもの、利用するもの」である「とはいえ」、「人びとも

やはり生きもの」である(ので、自然の中に身を置くとホッとする)というつながりになる。

18 指示語の指すものをとらえる

発展問題

P 41

- 1 (1) 例ボランティアに参加したこと (2) 例カバがかくピンク色の汗 (3) (この) 防災バッグ (4) 例北国の冬が厳しく、長いこと (5) 例まず私が先にやってみること (に)
- 2 (1) 思いどおりのこと (2) 自動車・携帯電話・空調機 に――。
- (3) 便利にするのはよいことだ (という考え方。)

1 (1) 「ボランティアに参加したことは大きなきっかけになりました」とつながる。

(2) 「これ」は体言なので、「カバはピンク色の汗をかく」の部分、体言で終わる形に変える。

(3) ふつう、指示語の内容は指示語よりも前にあるが、このように後ろにある場合もある。

(4) 前段落の内容すべてを受けているので、直前の文だけでなく、「北国では」からの内容をまとめる。

(5) (3)同様、指示する内容はあとにある。「しよう」につながるようにまとめる。

2 (1) 「便利というのは」何が「速くできるということ」なのかを、直前の部分からとらえる。

(2) 前段落の中から、「機械」にあたるものを探す。「例えば」以降が、具体的な機械の名前を挙げて説明している部分。

(3) 「新種の機械を作り出していった」と同じ考え方を「生き物にも向けようになった」とある。

- 1 我思う、ゆえに我あり
- 2 例(店頭)に並べられている(「胎教の音楽」と称するCD)のなか
- 3 (1) 土地 (2) 工
- 4 (1) 貯水池(ダ) 水施設など 「、分水施設」としても正解
- (2) a 世界観 b もの感じ方、考え方
- c 例私たちの「生きる意味」の世界に豊かさ(18字)
- (2) 様々な誤解や齟齬に――。(3) 相手の文化

1 指示語の指す内容が直前にないときは、**さらにさかのぼって**探す。「デカルトが唱えた」がヒント。前の段落に「デカルトは『我思う、ゆえに我あり』と主張した」とある。「唱える」と「主張する」が同じ意味であることをとらえよう。

2 「あらわれない」のは「子守唄の歌声」である。「子守唄の歌声」が何にあらわれないのかを考え、「そのなか」に合うように、「のなか」という形で答える。

3 (1) 直前に注目。「土地に水をみちびきいれ」と、**実際に指示語の代わりに入れてみて、文脈が通じるかを確かめてみるとよい。**

(2) 前の一文の内容を受けている。「水をみちびく」目的が「農作物を育て、豊かな生活と美しい国土を築きあげる」ことであった、という文脈をおさえる。

(3) 「農業、水道、水運のためにつくられた文化遺産」として具体的に挙げられているものを、直前の部分からとらえる。「これら」と複数の形になっていることが、ヒントになる。

4 (1) **段落の初めにある指示語は、前の段落全体を受けていることが多い。**前段落の内容をまとめてみよう。

ここでは、まず、a・bに注目する。これらは、二つとも「のの違い」という部分にかかっている。したがって、「様々な文化の固有の世界観」「ひとりひとりの異なるものの感じ方、考え方」を「違い」と言っていることをとらえる。

また、こうしたものを理解してコミュニケーションを行うと、私たちの「生きる意味」の世界が豊かになるのである。cは、この内容を「をもたらず」につながるように、「豊かさ」という形でまとめよう。

(2) 「乗り越えていく」必要のあるものが直前に出ている。

(3) 「どうすることが非効率的なのか」と問われているので、《内から、多様性の「効率」の悪さについて書いてある部分を探そう。一文目で「多様性は、効率性の悪いシステムであると言える」とある。ただし、この文では効率性の悪さを「具体的に」説明してはいない。さらに読んでいくと、この文のあとに、多様性が効率が悪い理由が具体的に説明されている。

19 具体例や比喩の意味をとらえる

発展問題

P 44

1 ウ

1 ドイツ人の哲学教授の「皮肉」が、**どんな状況をたとえたものであるのかを、文脈に沿って丁寧にとらえよう。**

まず、彼の言葉が「日本の哲学者」に対する皮肉であることをとらえる。「二階建ての家」にたとえられているのは、日本の哲学者の思想のありようである。

二階：「欧米の学説が干し物のように紐ひもに吊つりてならんでいる」

「干し物のように」「ならんで」という表現によって、それぞれの学説の価値や優劣を理解せず、一様に取り扱っている様子をたとえている。

一階：日本人としての日常の感じ方や考え↓(二階と)結びついていない

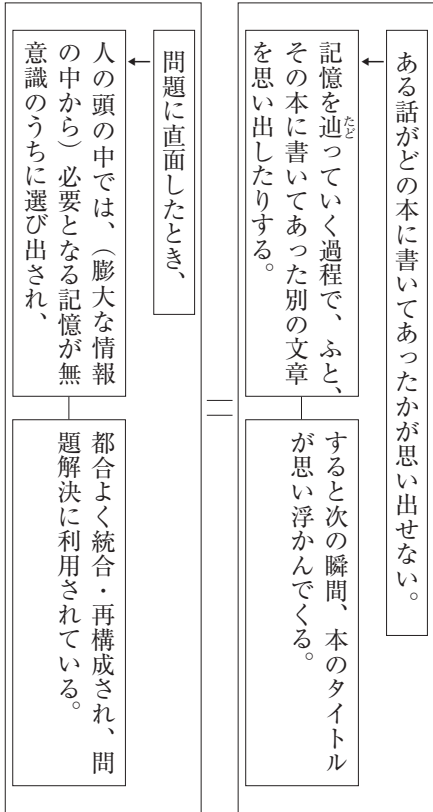
「一階」は「土台」や「基礎」を表している。これによって、日本人としての感じ方、考えの基礎となる自国の歴史や思想と、欧米から入ってきた学説とが結びつかず、ばらばらに存在している状態を表現している。

- 1 (1) 科学が理解 〳 なっている (こと)。(27字)
- 2 (1) 例膨大な情報の中から必要となる記憶を無意識のうちに選び出し、都合よく統合・再構成するもの。(44字)

1 (1) 「食わず嫌い」とは、まだ食べたことのない食べ物を、苦手だと決めてしまつて、食べようとしないこと。転じて、あるものの面白みや真価を理解しようせず、初めから拒否することの意味でも用いられる。

ここでは、**派生した意味**の方で使われていて、科学は難しく、自分たちには理解できないものだと思ひこみ、疎遠になつてしまつている状況を指す。「疎遠になつてい」が「食べないまま嫌になる」にあたる状況なので、これを含むように、指定された字数で抜き出す。

2 (1) この文章は、**具体例**としての経験(〳〳の部分) ↓ コンピューターとの比較 ↓ 筆者の意見」という構成になつてい。具体例と筆者の説明を、次のように並べてみると、対応していることがわかる。



最初に出された具体例があることで、筆者が説明したい後半部分の内容が理解しやすくなつていことをおさえておく。

20 段落ごとの要点をとらえる

発展問題

- 1 (1) 文明を崩壊
- (2) イースター島の文明(は)森の消滅(によって崩壊した)。
- 2 1 ア 2 ウ 3 イ

1 (1) 「そのときに倒され〳考えられている。」の文の「考えられている」は、一般的に多くの人が考えている状況を説明しているのであつて、筆者がここで考えたことではない。「根本的原因は、森の消滅にあつた**のだ**」の部分に、筆者の考え(〳意見)が含まれている。

(2) 繰り返されている「イースター島」「文明」「崩壊」のキーワードと、(1)の筆者の意見をおさえておこう。

2 文末表現や全体の流れに注意して、各段落の内容を考える。

1 「〳といわれている。」という文末に注目。これは世の中の状況や、ニュースなどで見聞きした事実を述べるときに用いる形である。

2 一文目は筆者の知識としての事実を、二文目は筆者の体験を表している。

3 「〳のではないだろうか。」という文末に注目。これは、筆者が考えたことや推測したことを表すときに用いる表現である。また、「戦後せつせと」ストレスが大きくなつてい。「〳」の部分は、2段落の「樹木」が「危険を感じる」ことをスギの木の場合にあてはめた説明である。

完成問題

- 1 (1) A 自分 B 相手 C 相手
- (2) 己と相手を同一と見ているといふこと (3) A
- 2 1 ア 2 エ

1 (1) 商人は「自分のことを『手前ども』という」のだから、Aは「自分」。

B・Cは、けんかなどの場面であることから考えると「相手」だとわかる。
(2) 「自分」「手前」という言葉と同様に、「おのれ」という言葉も、自分のことを指したり相手のことを指したりするというのが[4]段落の内容。これは、[2]段落にある「己と相手を同一と見ている」ことの例。

(3) [5]段落の「そんなこと」は、[2] [4]段落で述べてきた内容を指す。「自他の区別に対する無意識の本質的確信」については、すぐあとに「簡単にいえば」と言い換えているので、そこを読んで確認するとよい。

(1) 段落の最初と最後の文で「環境破壊は人間にとつての問題」なのだと同じことが繰り返されている。これが、この段落でいちばん言いたいことである。

(2) 傍線部直前の「こうして」の指す内容をつかむには、この[2]段落の内容をまとめればよい。良くないこととわかかっていても肉食や洗剤・化石燃料の使用などをやめられないことについて言い換えているのはIである。

21 段落の働きや構成をとらえる

発展問題

P 51

1 (1) イ (2) ウ (3) 二十一世紀 ばなるまい

(1) [1]段落の文末に「〜と思う。」「〜に思う。」とあり、筆者の意見が述べられていることがわかる。[2]段落も、最後の一文は「身につけねばなるまい。」とあり、意見である。どちらも、内容は人との結びつき方の変化についてであり、[1]段落から[2]段落へと、意見を発展させている。

(2) 「たとえば」は、筆者が主張したいことなどについての具体例を挙げるときに用いる接続語である。この文章で、具体例を挙げて説明しようとしている主張は、直前の[2]段落だけでなく、[1]・[2]段落を通じて述べられている。[1]・[2]段落では他者との結びつき方の変化が述べられているので、それに合うウが正解。

(3) この文章は、「問題提起(序論)」「具体例(本論)」「筆者の主張(結論)」の、**三段型構成**で書かれている。したがって、結論部にあたる[4]段落に注目。最後の一文で「二十一世紀は〜」と、今後のあり方について筆者の考えを打ち出している。「二十一世紀」は、書名にも用いられている語句であり、筆者の主張を述べるために重要な意味をもっていることがわかる。したがって、最後の一文から、指定された字数に合うように要点を抜き出す。

完成問題

P 52・53

1 (1) イ
(2) 利他行動が、自分の遺伝子の生存や子孫への継承に有利に働く行動だから。(34字) (3) ウ (4) E

(1) Aの「自ら」は「何の行動も取っていない」、つまり、注意をされた人のそばにいた人、Bの「自ら」は「喧嘩げんかになったり」などのリスクを被るといふのだから利他行動をした「注意をする人」を指す。よって、正解はイ。

(2) [6]段落と[7]段落の関係を考える。[6]段落に「生物学者たちは利他行動の進化の問題を研究してきた」とあり、[7]段落に「そのように生物学者は考える。」とあることから、[7]段落で生物学者たちが具体的に研究した内容と結果を述べていることがわかる。したがって[7]段落の内容をまとめればよい。
(3) [4]段落までで話題として取り上げた「利他行動」について、[5]段落以降でどのようなことが述べられているか、整理しよう。

- 5 「利他行動」についての考察
6 「利他行動」について、生物学的に分析
7 [6]段落の内容を、詳しく説明
8 「利他行動」について、違う角度(脳科学)から分析
9 [8]段落の根拠を説明
10 [9]段落を根拠として、脳科学の立場から、「利他行動」を再考
11 [10]段落で述べた内容についての補足
12 結論を述べる

- 選択肢のうち、これにあてはまるものはウである。
- (4) 生物学と脳科学の、利他行動についての考え方の共通点と相違点をとらえよう。

生物学……利他行動は、子孫を残す可能性が高まる。↓生存に有利。
 脳科学……利他行動は、快感を感じる。↓生存に必要なことをしようとする。
 どちらも、利他行動が人間の生存に有益なことだという点は一致している。これにあてはまるのはエである。

22 筆者の考えや要旨をとりとえる

発展問題

P 55

- 1 (1) ウ
- (2) 例 (人類は) (自然の淘汰に頼らずに) 自らの手でよりよい人間をつくれる (という考えには、疑問を感じる。)
- (3) 例人間は、自然の生命進化の過程に畏敬の念をもたねばならない。(29字)

- 1 (1) [2]段落との関係で[1]段落をとらえる。

〔1〕段落……**具体例** 台風が多い沖繩に生息するシロオビという蝶は、羽化日数が不揃いであるため、台風が来ても全滅することがない。

〔2〕段落……**筆者の主張** 人間が科学の力を過信している現状に対する疑問の投げかけ。「生命進化の過程」に「畏敬の念をもたなくなった人類は、かならずいつか破滅する」、「私たちは、ほとんど何も知らないのだ」ということを肝に銘じてほしい。

このことから、[1]段落で述べたシロオビの例は、「畏敬の念をもつべきだ」と考えている生命の遺伝子の知恵の複雑さを説明するためのものだと考えられる。これにあてはまるものはウ。

- (2) 「ほんとうにそうでしょうか」の「そう」の内容を明確にすること。こ

- の段落の冒頭部で挙げられている、研究者たちの考えをまとめよう。
- (3) 結論を述べた[2]段落のうち、前半は筆者とは対立する考え方が述べられているので、この段落の後半の内容をまとめる。繰り返されている「〜と思います。」という文末表現にも注目しよう。
- ・畏敬の念をもたなくなった人類は、かならずいつか破滅する
 - ・私たちは、ほとんど何も知らないのだということを肝に銘じてほしい
- この二行をそのまま抜き出しては意味が通じない。きちんと、何に畏敬の念をもつべきなのかなどの**言葉を補う**ことが必要である。

完成問題

P 56・57

- 1 (1) 4 (段落) (2) 6 (段落) (3) 嘔吐の研究に〜れているのか
- (4) スノクスが吐いた(こと)。 (5) ウ
- (6) 例問題意識をもち、努力と勉学を重ねることで、目の前に見えている事実の重要性(に気づくこと)。(36字)

- 1 (1) [3]段落までで「吐くこと」とスノクスをめぐる齋藤教授の**エピソード**を挙げ、[4]段落からはそれをふまえて、「発見」ということについて筆者がどのように考えているかが述べられている。

(2) 示されている文は、具体例ではないので、[4]段落以降に入ると見当をつける。そのうえで、[5]段落が、発見には「問題意識をもつこと」が必要という内容で終わっていることに注目。入れる文は「その一方で」とあることから、「問題意識をもつこと」とは反対の意の「偶然」を取りあげている[6]段落の冒頭がふさわしいとわかる。

(3) 線①の直後に「一体、自分は何を知りたいのか〜どんな道が開けるのか」とあるが、この部分では指定字数に合わず、具体性にも欠ける。[3]段落で述べられている「齋藤教授は問題意識をもっていたのです。〜を知っていたのです」という表現に注目して、そこに書かれていることをとらえよう。

- (4) 齋藤教授と周囲の研究者が、違う反応を示した「同じ事実」とは何であ

るのかをとらえる。それぞれの反応については②段落で具体的に説明されている。彼らは、「スunksが吐く」という同じ現象を目撃し、齋藤教授：「スunksは吐くぞ！」と興奮しながら言う。周囲の研究者：「そりゃ、そうですよ」と平然と答えた。という、違う反応を示したのである。

(5) この文章は、問題意識をもっていたために大きな発見をした齋藤教授の事例をもとにして、「発見のために必要なものは何か」を考察する、という構成になっている。また、齋藤教授の問題意識を明確にするために、周囲の研究者との比較がなされている。これを説明しているものは、ウ。

(6) ④段落以降で述べられている、「発見」についての筆者の考えをおさえるよう。

- ・目の前に見えている事実の重要性に気づいてこそ「発見」。
 - ・事実の重要性に気づくためには問題意識が必要。
 - ・一方で、「偶然」に支えられていることもあるが、「単なる偶然」ではない。(どれほど努力と勉強を重ねてきたかにかかっている。)
- 指定されている言葉を含む形で答えをまとめる。

23 場面や状況をとらえる

発展問題

P 59

- 1 (1) ア (2) 上野公園に古くからある西洋料理店
- (3) 二(人) (4) 例ルロイ修道士に呼び出されたから。
- 2 (1) 教室 (2) サンペイ(君)
- (3) 例サンペイ君が急いで来てくれと言ったこと。

1 「さび・たいび・誰が・どうした」をとらえると、場面や状況がわかる。桜の花が散って葉桜に向かうという春の終わりに、上野公園内のお店に、語り手(主人公)が、ルロイ修道士に呼び出されて来た、という状況を読み取る。

2 三月になったばかりの昼休み(いつ)、博士(誰)が教室(どこ)で本を読んでいると、サンペイ君(誰)が博士を呼びに来た、という状況をとらえる。

完成問題

P 60・61

- 1 (1) 牧人 (2) ウ (3) a エ b ウ c イ (2) (梨の木を)愛情込めて見る(こと)。

1 (1) 二行目の「メロスは、村の牧人である。」に着目する。「牧人」とは牛や馬を飼う人のことだが、ここでは羊飼いのこと。

(2) 理由を表す「それゆえ」に着目すると、その前後の部分から、妹の結婚式の準備をするために町にやって来たとわかる。

2 小説では主人公が語り手になって物語が展開していくこともある。登場人物をおさえて、会話の内容を確かめる。叔母さんや母が笑いながら祖父の思い出話をしているのを聞いて、思い出話の対象となったことに祖父がなくなっただけで湧いてきて、主人公が「急に寂しくなった」場面である。

3 (1) 会話しているのは、文章の後ろの方に名前が出てくる久雄と響子である。文章の前の要約文から、登場人物がどんな状況にあるのかをおさえる。Cは、——線①の直後に「ところが」とあることに注目。思っていたことと違って「あなた(響子)」が「がんばりになった」のだから、がんばるとは逆の内容のイが正解。

(2) 「初心に帰る」とは、始めたころの新鮮な気持ちや謙虚な気持ちを出して再び物事に取り組むということを表す慣用的な表現。文章に描かれている状況をつかむことで、より具体的な意味がつかめる。ここでは、「この文より前の文章中から七字で」という指示に従って、前にさかのぼっていく。すると、久雄のように年数を重ねると、梨作りは「収入のための手段」になってしまっていて、初心を忘れ、「梨の木をそれだけ愛情込めて見るちゅうことは、なかなかできない」ことになると言っている。

24 心情や、心情の変化を読み取る

発展問題

P 63

- ① 別れがつらくて ② 声を上げて泣いた
 イ ③ 僕は思わず息を止めた。に――。 ④ ア

① ルントウと別れることに対して、「つらくて」と直接心情を表す表現が用いられている。その心情は、「私」が声を上げて泣いた行動によって、より鮮明にとらえられる。

② 初めの会話では、「先生」の進まないことを気にかけている。「だったらいいのですが……。」の「……」から、先生の返事を聞いても、まだ心配が残っている様子がわかる。**直接的に言葉や行動に表されていない心情は、登場人物の立場になって考えることにとらえられる。**

③ 「息を止める」とは、呼吸も忘れるほど驚いた様子を表す。木の陰にいる女の子を見ていた「僕」は、女の子が顔につけていた仮面を外したのを見て、思わぬ進展にびっくりしているのである。

④ 線部だけを読めば、駅の情景を表した文でしかないが、直前の「風景は突然なじみのないものになった」とつなげて読むことで、――線部の情景描写に暗示されている人物の心情を読み取ることができる。

完成問題

P 64・65

- ① イ・エ (2) ウ (3) 空は夕焼け色にかがやいていた
 (1) 口笛をふく (2) イ ③ (1) 雄吾はいっ源 (2) エ

① 姉の会話文に着目する。「ほんと?！」と驚き、「アノリスの話の聞かなくてすむ」と言いながらも、「よかったじゃん。」と言っている。

② 文章のあとの注意書きにあるように、少年はアノリスを手に入れるために二週間、アイスを食べられなかった。そのアイスを手に入れるため

せている。これらの状況から、このときの少年の気持ちを考える。

③ **情景描写に心情が反映されたり、暗示されたりしていることは多い。**「夕

② ① ボールが捕えられない間は口をきかなかった豪が、ミットに捕えた瞬間、口笛をふき、大声を出したことをとらえる。ボールを捕えられたことの喜びが感じられる。

② 「たった」という表現に、そんなにすぐに自分のボールを捕れるとは思っていなかった巧の驚きが表れている。自分のボールに自信をもっている巧が、その球を「たった五球」で捕えた豪に感嘆しているのである。

③ (1) 雄吾は源ジイが歯をくいしばって歩く様子を見ているが、同時に、「いっつ源ジイが腰を落としてもいいように車椅子を押しながらあとを追っている」のである。

(2) 雄吾と源ジイは、夕日がさしこむ廊下にいる。文章の最初の六行から読み取れる夕日の描写は、強く濃い色の夕日である。そこからは、強さや厳しさなどの**心情が連想**される。また、七行目の「あたたかな光」は、源ジイを見守る雄吾の温かい気持ちと重ね合わせることができる。

25 言動の理由をとらえる

発展問題

P 67

- ① 例ルロイ修道士の言葉が遺言のようだったから。
 (1) エ (2) 電車通学も

① 直後の「これでは、――線部の前の「仕事がぐくください。」というルロイ修道士の言葉を聞いているこの場の状況を指している。こんな遺言のような言葉を聞いたので、「冗談じゃない」と思ったのである。

② (1) テルは電車通学をする生徒たちが持つ定期券がうらやましくてたまらないのである。直接「〜から」などの表現はないが、定期券について詳

- しく描写している部分から、その理由を読み取ることができる。友人がテルに自慢しているわけではない。
- (2) テルの不満な気持ちが、「母をなじる」という行動に表れていることを読み取る。「なじる」は「とがめる」「非難する」という意味。

完成問題

P 68・69

1 (順に)香炉と燭台・手製の偶像

- 2 (1) イ (2) (順に)実力・監督の息子
- 3 (1) イ (2) あきらめたりしてへんよ。

1 — 線部の理由はその後から述べられている。「私」は、ルントウが「香炉と燭台」を所望したとき、「偶像崇拜」だと笑った。しかし、自分の「希望」も、本当は実体のないもの(「手製の偶像」)にすぎないのではないかと気づいて「どきっとした」のである。

2 (1) — 線①の直前に「だからこそ」とあることに着目する。典子は父親を咎めているのではない。家族としての情から出た言葉だとわかるからこそ、徹夫もその気持ちがよくわかり、自分がこたえられないことに胸が痛むのである。

(2) 徹夫の心の中の言葉と「実力の世界だからな」に着目する。自分が監督だからといって実力のない智を試合に出すわけにはいかないのである。

3 (1) **文章の前の要約文に着目すると**、ようやく山を越え化石の発掘現場にたどりつこうとしていたことがわかる。それだけに、化石が好きな千絵が簡単にあきらめる理由が遠子にはわからず、いらだっているのである。直後の言葉で、遠子はその思いを伝えている。そのために、「ばか」という叫びを呑み込んだのである。

(2) 遠子に比べて、千絵の様子は終始のんびりしている。化石を見ることを断られた悔しさが感じられない。それは、千絵があきらめてはいないからだということが読み取れる。

26 登場人物の人柄や性格を読み取る

発展問題

P 71

1 屈託のない明るさ

2 (1) 無鉄砲 (2) ウ

3 イ

1 「屈託(の)ない」とは、心配や気にかかることがないということ。

2 (1) 最初の一文に着目する。「無鉄砲」とは、「危険を考えないで行動すること」である。そのあとに書かれている行動からも、その性格がわかる。

(2) 自分自身がどれほど「無鉄砲」であったかが、二文目以降に述べられている。同級生に「弱虫やーい」と言われたのが悔しくて二階から飛び降りたことから、負けず嫌いの一面がうかがえる。

3 徹夫と智の**会話に着目する**。レギュラーになれなくても、野球が好きだから野球部に入るといふ智をまずとらえる。それに対して、その言葉を聞いて、徹夫は「頬がゆるんだ」とあるので、うれしく思っていることがわかる。初めは心配していた徹夫も、智の考えに賛同したのである。

完成問題

P 72・73

1 (1) 例蟻の列を丹念に観察して遊ぶ様子。 (2) 飽きっぽい性格

2 イ (1) 私が悪者に (2) ア

1 (1) — 線部の直後の段落に、「私」が一つのことに集中する癖について具体的な行動で説明されている部分がある。

(2) 兄の性格は最初の一文に「飽きっぽい性格」とはつきり述べられている。これは「私」の「対象にどこまでも集中していく癖」とは対照的である。

2 「伯父」とは、洪作の伯父で校長をしている石守森之進のこと。祖父に伯父のことを洪作が訊いている場面である。祖父の**言葉に着目して人物像をとらえる**。自分の好きなこと、立派だと思ふことをすればいいと、洪作と唐平に言っているのが、ア・ウはあてはまる。また、洪作は祖父が好きで尊敬す

るといふのだから、エもあてはまる。イは伯父のことである。

- 「泣いた者が勝ち」という状況で、自分が「悪者」になっても「絶対に泣くものか」と意地を張り通したことから、負けず嫌いな性格がわかる。
- 「私」の目には、両親が「淡々とした人間」と映っていた。しかし、けんかをして帰ってきた「私」に対し母親は、「いっさい聞かず」にコーヒールを勧めている。ここから、母親のさりげない気遣いが感じられる。

27 表現に目を向ける

発展問題

- イ
- ウ
- a せんせん b よろよろ c こんこん d 吸い込まれる

P 75

1 「わっと」は擬態語。「すすり上げすすり上げ」は繰り返しの表現で、いずれも良平が泣いている場面の様子を具体的に描写している。

2 庄兵衛は、喜助の頭から「毫光」が差すように思っているのだから、ありがたいものを見るように尊敬の念を抱いて喜助を見たのである。この表現によつて、単に「尊敬の念を抱いた」と表現するよりも、尊敬の思いの深さを読者に実感させることができる。

3 擬音語・擬態語、擬人法を使つて、メロスが泉の水を飲もうとする場面を描写している。また、耳を澄ます様子を「息をのんで」、身をかがめる様子を「泉に吸い込まれるように」（直喩）など、映像を見るかのように表現していることにも着目する。

完成問題

- ア・ウ
- イ
- （順に）巨大な歯・音・色・におい
- (1) C (2) 父の外出 (3) イ

P 76・77

1 まず、短い文が多く使われていることに着目。これにより、読者はコマ送りのように二人の動きを実感することができる。また、「ぼく」と徹也がみあう様子を、「ぐらりと」という擬態語や「捨て身の『宙に』仰向けに」などの具体的に印象的な修飾語で表現しているのも、実感を高める効果をあげている。

2 「東海岸の海が耳打ちしてきた」「海がふたりに話しかけてきた」は擬人法である。「いま目に曇らせるな」「灰色の雲に輝かせる」とは、今は苦しめても明るい未来があることを信じさせる言葉である。

3 特徴のある表現に着目する。「巨大な歯のような」（直喩）、「ピアノはくんにに、キキキキと笑う」（擬声語と擬人法）という表現をはじめ、視覚・聴覚・嗅覚を用いた表現により、ピアノへの嫌悪感が伝わってくる。

4 (1) 「降りるのは厭だ」と思いながらも「しぶしぶ」降りたのは、この言葉を受けてのことである。一行目では「イチロー」であったのが、ここでは「一郎」になっているところから、父の声の調子や大小が思い浮かぶ。

(2) 線①の直後を読んでいくと、「埃をはらっている音」であり、「その音はまた、父の外出の前触れでもある」とある。最初に音で読者の注意を引きつけておいて、あとでその意味を説明している。

(3) 線②の前に、一郎が学校が嫌いであり、帰宅すると「心がすつかり萎えている」とあることに着目する。そのような気分を、線②とたとえているのである。作者独特の表現なので想像しにくいのが、一郎が学校にいる間に陥つたよくない気分をたとえていることはつかめる。怒りなどの強い気持ちはこの表現では合わないので、イが正解。

28 主題をとらえる

発展問題

- ウ
- (1) (友に)信じられている(から)。(2) イ

P 79

1 まず、カッチャンとお母さんがおかれた状況をとらえる。熱さに悲鳴をあ

げたカッチャんに、ぐったりしたお母さんが我に返り、必死で水を求めている。そのわが子を助けようという思いが、自分の体から血を噴き出させたのである。

2 (1) 「それだからくから走るのだ。」というメロスの言葉に着目する。

(2) 「あの方は、あなたを信じておりました。」と、「信じられているから走るのだ。」に着目する。**登場人物の行動の意味や理由は、主題につながる場合が多い。**

完成問題

P 80・81

1 (1) A ウ B イ C エ D ア (2) ウ・オ

2 (1) 例鳩がレースで優勝できたのは、戸石兵吾が、毎日鳩の世話を
して訓練してくれたおかげだということ。

(2) 例鳩に対する愛情と努力。(11字)

(3) 例鳩が一着になったことを素直に喜べない気持ち。(22字)

1 (1) A は、「私」の言葉に対する坂戸君の反応を考える。B は、「私」への
ほめ言葉と考えられるので、イが適切。C は、直後で「坂戸君にとって私
は一つの出来事ではない」と言っていることから、エが適切。D は、思
いがけない告白に驚いているのである。

(2) 坂戸君の言葉に着目する。「子どもはく決められない」と言っている。

また、「気付かないところで中原っている守られてる」とある。

2 (1) 「そうした事情」については、同じ段落の初めの方に書かれている。こ
れをどのように新聞記者に話したのかを、「私」になったつもりでまとめる。

(2) (1)で答えた戸石兵吾の鳩への接し方が、**線②**のあとに「鳩に対する
彼の愛情も努力も」という表現で再び書かれている。

(3) 自分の鳩が一着になった事実はいれしいものの、「私」のことが新
聞に出て、実際に鳩に愛情を持って一生懸命に訓練した戸石兵吾のこ
とが何一つ触れられていなかったことに、「私」は釈然としない思いを抱き、
心から喜べないのである。

29 随筆を読む

発展問題

P 83

1 (順)読み聞かせ・黄金のひととき・いいもの 2 イ
3 こそばゆいような晴れがましいような気分 に――。

1 母がしてくれたことは、「読み聞かせ」である。筆者にとって本を読んで
もらう時間はわくわくする時間であり、それによって、本の面白さ、楽しさ
に気づいたことを述べている。その時間を「黄金のひととき」と表現したと
ころに筆者の思いが読み取れる。

2 筆者の体験(出来事)は初めの二文に述べられている。三文目の「く気がし
ています。」という**文末表現**に着目すると、筆者の感想(考えたこと)がわかる。
3 **体験(出来事)と感想を読み分ける。**――線部までが体験(出来事)で、
筆者が親元を離れたときの父からの手紙について述べられている。そのあと
で、手紙の表書きから感じたそれまでとは違う父のことを「突然の変わりよ
う」と表現し、そのときの気持ちを「こそばゆいくなったのであろう」と回
想しているのである。

完成問題

P 84・85

1 ウ 2 ア

3 (1) ウ (2) けれども (3) 細かいが質量のある快感

1 **線部**は、筆者がインタビューされるとときよく話題になること。その話
題について、第三段落「むろんどの道においても」から、筆者の意見が述
べられている。「わたしは信じる。」という**文末表現**に注意するとよい。

2 **随筆には筆者の人物や個性が反映される。**歌人の筆者が比喩表現を巧み
に用いて、開店前の喫茶店の店内を描いている。客のいない店内についての
「まだ眠りの中にあるよう」という表現や、「テーブルや椅子たち」「テーブ

ルの上のナブキンや塩、コショウたち」などの表現に注目。客としてくつろいでいるときには感じなかったそれぞれの存在感を、筆者ならではの表現で表すことで、読者に臨場感を与えている。

3 ①の「雨粒」は、「無邪気かわいらしい粒々」だったのである。この「雨粒」を筆者は比喩表現などを用いて、ア・イ・エと表現している。ウは、「粒ではなくなつて」しまった状態に対する表現。

②の直後に着目。「雨そのものにさわることはできる」が「雨粒」を直にさわるのがなかなかできないのは、「雨自体は手に触れた瞬間、もう粒ではなくなつてしまふから」だと述べている。
③ 筆者は梅雨の「傘越しの雨」の感触について、「たとえていうのなら」と述べていることに注目する。

30 歴史的仮名遣い

【基本チェック (P86) の現代語訳】 今となつては昔のことだが、竹取の翁おきなという人がいた。野山に分け入つて竹を切つては、いろいろなことに使つていた。(その人の) 名前を、讃岐の造たけといつた。

(ある日、竹を切りに行く) その竹の中に、根元の光る竹が一本あった。不思議に思つて、近寄つてみると、竹の筒の中が光つている。それを見ると、(身長が) 三寸(約九センチメートル) ばかりの人が、まことにかわいらしい様子で座つてゐる。

発展問題

- 1
- | | | |
|-----------|-------------|------------------|
| (1) いわれけり | (2) きのう | (3) こまわいず |
| (4) みいたりし | (5) おごがましく | (6) はず |
| (8) ようす | (9) いせうすべけれ | (10) いずれもよはなつじなり |

P 87

1 実際に声に出して読んでみて、その発音と表記の違いを、次の点に注目して確認しよう。(1) 「は」→「わ」 (2) 「は」→「わ」 (3) 「ひ」→「ひ」「は」
(4) 「あ」→「わ」 (5) 「を」→「お」 (6) 「う」→「ず」「す」
(7) 「くわ」→「か」 (8) 「やう」→「よう」 (9) 「る」→「ら」「ら」
(10) 「すべけれ」→「すべけれ」

↓「もう」 (10) 「づ」→「ず」「さう」→「そう」

完成問題

- 1 ① いなかびたる ② いいやりたる ③ さようじゆん
④ よろず ⑤ じろづかい ⑥ おかし

P 87

1 ①「る」→「い」「い」 ②「ひ」→「い」「い」 ③「やう」→「よう」「ず」 ④「ひ」→「い」「い」。なお、「心づかひ」「心」と「遣(つか)ひ」が合わさつたもので、「づ」「は」そのまま直さない。⑥「を」→「お」

【現代語訳】 どこへでもいいが、しばらく旅に出(てよそに滞在す) るのこそ、いかにも新鮮な感じがするものだ。

その辺をここあそこ見て歩けば、田舎ふうな所や山里には、実に見慣れぬ珍しいことが多くある。

伝手(人とのつながり)を求めて都のわが家へ手紙を送る。その中に、「そのこともあのことみな、ついだつてに忘れないでやっておくれ。」などと言い送るのも面白い。そういう所では、何事につけても気配りさせられるようになり、持つていった道具なども、よいものは(家で見るより) よく見えるし、芸のある人、姿形のいい人も、ふだん(都で見る) より味わい深く見える。

寺や社に人知れず籠るのも面白い。

31 重要古語の意味

【基本チェック (P88) の現代語訳】 春は明け方(がいい)。しだいに白んでいく山の稜線りやうせんに近い空が、少し明るくなって、紫がかった雲が細くたなびいている(のは風情がある)。夏は夜(がいい)。月のころはもちろんだが、やみもやはり、螢がたくさん飛びかつている(のがよい)。また、ほんの一、二匹などが、ぼんやりと光つて行くのも風情がある。雨などが降るのも風情がある。

秋は夕暮れ(がいい)。夕日が差して山の端はにたいそう近くなつたところに、鳥かきがねぐらに行くと、三羽四羽、二羽三羽などと、飛び急いでいるのまでしみじみとした感じがする。

発展問題

- 1 (1) ア (2) イ 2 (1) ア (2) ウ

P 89

- 1 (1) 「つとめて」は「早朝」という意味。重要古語なので覚えておこう。

(2) 「つきぎきし」は、その場の状況に適している様子を表す。

【現代語訳】 冬は早朝（がいい）。雪が降っているのは言うまでもなく、霜がたいそう白いのも、またそうでなくてもとても寒い時に、火などを急いでおこして、その炭を持って（廊下などを）渡っていくのも（冬の朝に）たいへんふさわしい。

- 2 (1) 現代語の「年ごろ」とは異なる意味で使われることが多い。「長年の間、数年来」の意味。

(2) 「ゆかし」は、興味もたれる様子を表す。前後の文脈によって「見たい」「聞きたい」などの意味になる。この語も現代語の「奥ゆかしい」などの「ゆかしい」とは意味が異なる。

【現代語訳】 「長年思っていたことを、果たしました。聞いていたのにも増して、尊くいらっしゃいました。それにしても、お参りをした人が皆、山へ登ったのは、何事かあったのでしょうか、知りましたけれど、神様にお参りするのこそ本来の目的だと思っ、山までは登って見ませんでした。」

完成問題

P 89

- 1 (1) イ (2) ア

1 (1) 「いかが」には「どうして…か、いや…ない」という反語の意味もあるが、ここでは清少納言が悩んでいるところから「どのように」という疑問の意ととるのが適切。懐紙に書かれた下の句に対してどのように上の句を付ければよいのだろうか、と悩んでいるのである。

(2) 「めでたし」は、強く心をひかれる様子を表し、「すばらしい」「立派だ」「美しい」などの意味がある。ここでは、「見事に」が適切である。

【現代語訳】 今となつては昔のことだが、二月末日、風がさつと吹き、雪がちらつく頃、公任を、宰相の中將と人々がお呼びしていた時、公任が清少納言のもとへ懐紙に書いて、少し春ある…（少し春めいた感じがすることだ）とあった。本当に今日の様子に大変よく合っているが、どのように上の句を付ければよいのだろうか（清少納言は）思い悩む。

空さえて…（空が寒々として桜の花に見まがうように散る雪に）と、見事に書いた。（公任は）たいそうおほめになったのだった。

32 助詞の省略と意味

【基本エッセツク（P 90）の現代語訳】 かわいらしいもの、瓜にかいた幼児の顔。すずめの子が、ねずみの鳴きまねをすると躍るようにして来る姿。二、三歳ぐらいの幼児が、急いではつてくる途中に、とても小さなちりがあつたのを、目ざとく見つけて、とてもかわいげな指つまんで、大人一人一人に見せているのは、たいへんかわいらしい。

おかつば頭の幼女が、目に髪がかぶさっているのを、払いのけもしないで、首をかしげて何かを見ているのも、かわいらしい。

発展問題

P 91

- 1 (1) ある人が、弓を射ることを習ふに (2) a 2 b

1 (1) 主語を示す格助詞の「が」と、対象を示す格助詞の「を」を入れる。

(2) a の「の」は「師が言われるには」という意味で、主語を示す。他は連体修飾語を作る「の」である。

【現代語訳】 ある人が、弓を射ることを習うときに、二本の矢を手にはさんで持つて的に向かった。師が言われるには、「初心者は、二本の矢を持つてはならない。（二本の矢を持つと）あとこの矢を頼みにして、初めの矢を射る時にいかげんな気持ちになるものだ。毎回ただ成功するか失敗するかと迷わず、この一本の矢で決めようと思え。」と言っ。

- 2 a・cは格助詞。bは逆接を表す接続助詞である。

【現代語訳】 孟宗は、幼くして父に死に別れ、一人の母の面倒をみていた。母は年老いて、いつも病気で苦しみ、食の味わいも、その時ごとに変つたので、求めるすべもないものを欲しがった。冬の季節なのに、竹の子を欲しいと思つた。すぐに、孟宗が、竹林に行つて採らなければならない、雪深い時季なので、どうして簡単に手に入らうか。

完成問題

P 91

- 1 (1) C (2) ア (3) E

1 (1) Cは連体修飾語を作る助詞の「の」。他は主語を示す。

(2) 「二、三羽ここに下りて、自分がまずえさを探し求めて…」ということ。

(3) 人が恥ずべきなのはどのようなことか。鳥ですら友達に信があることは、人間にひき比べて考えてみるとどうかというのである。

【現代語訳】二月になっても野山一面が雪に覆われている中に、清水の流れは水温が温かいので雪が少し消えている所もあり、ここが水鳥が下りる所である。雁がこれ（雪が消えている所）を見ると、まず二、三羽がここを下りて自分がまずえさを探し求め、そのまま糞を残してえさがある所の目印とする。地方の言葉でこれを「雁の代見立て」という。雁がこのようにするのは友達のを（そこに）集めてきて、かれらにもえさを探させようとするからである。（雁が）友達に誠意があることは人も（自分の身にひき比べて）恥ずべきことである。

33 動作主をとらえる

【基本チェック (P 92) の現代語訳】熊谷が、「そこを行かれる」あなたは大将軍とお見受けいたします。見苦しくも敵に後ろをお見せになるものですな。お戻りなさいませ。」と扇を上げて招いたところ、（その武者は）招かれて引き返す。（その武者が）波打ちぎわに上がろうとするところに、（熊谷は馬を）並べてぐいっと組んでどしんと（馬から）落ち、（その武者を）取り押さえて首を切ろうと、かぶとをおおむけにして（顔を）見ると、年が十六、七ぐらいの（若武者）が、薄化粧をして、お歯黒をつけている。わが子の小次郎の年齢くらいで、顔立ちがとても美しかったので、どこに刀を刺したらよいかもわからない。

発展問題

- 1 イ 2 ① イ ② ア

P 93

1 直前の「かの木」とは「榎の木」。人から「榎木の僧正」と呼ばれることを「然るべからず」と思い、榎の木を切ったのだ。「榎木の僧正」と呼ばれた人は良覚僧正である。「公世の二位」は実際には登場していない。

【現代語訳】従二位藤原公世の兄で、良覚僧正と申し上げた方は、非常に怒りっぽい人であった。住まいの僧坊のそばに、大きな榎の木があったので、人々は、「榎木の僧正」と言った。この名前がけしからんと言って、その木を切ってしまった。

2 動作主をとらえるときは、敬語にも注意しよう。この文章での登場人物は昭乗と將軍。「問はせ給ふ」は「お尋ねになる」という尊敬語なので將軍の動作。「申す」は「言ふ」の謙譲語なので、昭乗の動作であるとわかる。

【現代語訳】昭乗は文字を巧みに書くという評判だった。（京都から）関東へ行って將軍の御前で書書いたのだが、関東は水が悪くて、筆の勢いが伸びにくいという事情を言ったところ、「都ではどんな水を使って書くのか。」と（將軍が）お尋ねになった時（昭乗は）

「京の柳の水が軽くてふさわしい。」と（將軍に）申し上げた。

完成問題

- 1 ウ

P 93

1 場面の状況をしっかりとらえる。餅を持ってきて藤屋の店に並べa「受け取ってください」と言ったのは「餅屋」。そのときは聞こえぬふりをしていて、あとでb「今の餅を受け取ったか」と聞いたのは「旦那」。それに答えてc「もう（餅をこちらに）渡して（餅屋は）帰りました」と言ったのは「手代」。最後のdは、手代の答えを聞いた旦那の言葉である。

【現代語訳】十二月二十八日の明け方、（餅屋は）忙しそうに連れだつて餅をかつきこみ、藤屋の店に並べ、「受け取ってください。」と言う。餅はつきたてで好ましい感じで、正月らしく見えた。（藤屋の）旦那は聞こえぬふりをしてそろばんをはじいていたが、餅屋は時節柄ひまを惜しみ、何度も催促するので、気のきいた手代が、はかりできちんと量り、餅を受け取って帰した。二時間ばかりたつて、（旦那が）「今の餅は受け取ったか。」と聞くので、（手代は）「もう餅を渡して帰りました。」（と答えた。）（旦那は）「この家に奉公するほどにもないやつだ、ぬくもりの冷めない餅をよくも受け取ったものだ。」と言うので、また量ってみると、意外と目方が減っていることに、手代は恐れ入って、食いもしない餅に口を開けていた。

34 係り結び

発展問題

- 1 (1) 強調 (2) ウ

P 95

1 この「こそ」は係りの助詞。係りの助詞のうち、「ぞ・なむ・こそ」は、その前の語を強調する。また、「や・か」は疑問などを表す。これらの助詞があると、結びの言葉はある決まった活用形になる。ここでは、文末の「しか」が対応している。「しか」は過去の助動詞「き」の已然形。

【現代語訳】中野三郎という人が、川の中の大きな岩に腰をかけて、笛を高らかに吹き鳴

らしていたが、水の音に響き合ってしみじみと風情があるときに、そばにいた法師が、「春に趣深く聞こえてくるのは」と、昔の和歌の二節を口ずさんだのが、この時に合っていて情趣深く思われた。

完成問題

P 95

- 1 (1) こそ (2) けり

1 (1) 係りの助詞は「ぞ・なむ・や・か・こそ」の五つ。

(2) 係りの助詞「ぞ」がなければ、文の終わりは終止形となる。

【現代語訳】熊谷が涙をおさえて申し上げたことには、「お助け申そうとは思いますが、(源氏の)味方の軍勢が、たくさん集まっています。とうてい逃げになれないでしょう。他の者の手におかけ申すより、同じことなら、直実の手におかけ申して、後世のご供養をなさしあげましょう。」と申したところ、「ただ早く首を取れ。」と(若武者は)おっしゃった。

35 作者の考えや主題を読み取る

【基本チエツク (P 96) の現代語訳】

仁和寺にいたある法師が、年を取るまで石清水八幡宮を参拝したことがなかったので、残念なことに思われて、ある時思い立って、たった一人、徒歩でお参りした。極楽寺や高良神社などを拜んで、これだけのものと思込んで帰ってきた。

さて、仲間に向かつて、「長年思っていたことを、果たしました。うわさに聞いていた以上に、尊くいらっしやいました。それにしても、参拝している人が皆、山へ登ったのは、何かあったのでしょうか、(それを)知りたかったけれど、石清水八幡宮に参拝することが本来の目的だと思って、山までは登って見ませんでした。」と言った。

少しのことにも、その道の先導者はあってほしいものだ。

発展問題

P 97

- 1 (1) イ (2) ① 東 ② 南 (3) エ

1 (1) 「ある人」のやしきは東向きに建てられていたが、南向きがいいと聞いている。そこで、火災にあったのを機会に、「今こそ南向きに建て直そう」と言ったのである。

(2) ① 東向きから南向きに建て直したのに、「もとの」①向きがよかつたのに」と言われたというのだから、①には「東」が入る。② 「ある人」の屋敷の向きは、これまでに東向き↓南向き↓東向きと変わった。そして「このごろ聞くに」(＝このごろ聞くところ)、もとの南向きがいいと言う人が多いということなので、これまでのことから考えると、また火災でもあれば、もとの南向きになるだろう、というのが筆者の予想。したがって②には「南」が当てはまる。

(3) 最後の二文「またよき事ゝいつともあるまじ。」が筆者の考えをまとめた部分である。どんな具体例をもとにどんな考えを述べているかをつかむ。

【現代語訳】ある人の屋敷は、東向きに建てられていたが、年月がたつにしたがつて、南向きがいいだろうと言う人が、次第に多くなり、その後火災にあったので、今こそ(南向きに建て直そう)と言って、南向きになったが、もとの東向きがよかったのと言う人が、また次第に多くなり、これも火災にあったので、また東向きになった。このごろ聞くともとの南向き(いい)と言っている人が多いという。また年月がたつて、火災があれば、もとの南向きになるだろう。またよいことがあればいいなあとあって、ここにあるのをあそこに行こうと思ひ、これをしてはあれをしようと思つて、心が落ち着かなくなるのである。しかし心が満足するよいことは、いつもあるまい。

完成問題

P 98・99

- 1 (1) 例橋を架ける (2) ウ (3) 今世のくを得ず (4) エ
2 (1) 怠る心 (2) A 朝 B 夕 (3) ウ (4) イ
3 (1) 例斧をといで針にしようとする老人に感動して、ますます努力して読書に励んだから。(38字) (6) ア

1 (1) あとの治貞卿の言葉の中に、「多くの人の手にて造り出せる橋」とある。ここから、多くの人々が「橋を架けること」に力を尽くしたことが読み取れる。(2) 治貞卿が多くの人々の力で橋が完成したことに感動していることから考えれば、ウが適切である。イ・エのように馬のために馬の考えたのではないし、音とは関係ないのでアも不適切である。

(3) 「常の言ひぐさに」(＝ふだん言っていることに)とあるので、この直後から会話文が始まると考えられる。会話文の終わりは、引用の「と」に着

目してとらえる。「と宣ひけるとぞ」(＝とおっしゃったそうだ)とあるので、この「と」の直前までである。

(4) (3)の「常の言ひぐさ」が治貞卿の考えである。「我が身の上の事に引きあてて」の部分に着目して考える。

【現代語訳】

紀伊の中納言源治貞卿が、はじめ西条にいらっしゃった時、福田の橋が洪水にあつて流れたので、新しく造つて架けた。その卿がある所へ行こうとして、そこをお通りになつたが、(橋に)近くなつて馬から下り、橋の下に入つて見て回りながら、「多くの人がそんなにも力を尽くしたのだ。」と言つて、そのまま歩いて行き橋の上にお上りになつたので、お供の人々が「お馬にお乗りになりますか。」と申したところ、「いやいや。多くの人の手で造り上げた橋を、私が初めて渡るのに、馬の蹄で踏みつけることがあつてはならない。」と言つて、お乗りにならなかつた。この卿はもともと学問を好んで、ふだんの言いくさに、「今の世間の人々は、賢人や聖人の書物を読んで道理について論ずるが、自分の身に照らして考え、悪い心や行いを改めようとすることを知らない。これはどういふことだろう、私はその心が理解できない。」とおっしゃつていたそうだ。

2

(1) 朝だけ走る(速い)馬と、一日中歩く(遅い)牛を比べた例をおさえると、「怠る心」が「学に志すもの」の妨げになることがわかる。

(2) 前後の内容をおさえると、「ほんのわずかな時日」という意味の四字熟語である「一朝一夕」になることがわかる。

(3) 「しるし」には、「目印」などの意味もあるが、「今日も明日も続けて、そうしてはじめて」という**文脈から考えれば**、ウの「効果」が適切である。

(4) 「やすし」にもいろいろな意味があるが、人が一生の力をその道に使つても「なほその興義にいたることは」という文脈から、イが適切である。

(5) 「むかし、李白」以降の話に着目。李白は、誰が何をしているのを見て、どうしたから、名をなしたかを読み取る。

(6) 「つとめはげむ」「今日止まず、明日止まず」「さらにつとめて」などの言葉から、「努力」の大切さを主張している文章だとわかる。

【現代語訳】

学問を志すものは、昼も夜も努力するとはいつても、半月を過ぎ、一か月を経ると、怠ける心が早くも生じる。馬は(足が)速いといつても、朝ちよつと走つて止まれば、どうして牛が一日中歩くのにならなかつたか、いや、かなわない。谷間の石が磨かれるのも、井戸のふちが丸くなるのも、一朝一夕の力によるのではない。今日も(努力を)やめず、明日もやめず、そうしてはじめてその効果があるのだ。人が一生の力をその道に使つてさえ、やはりその最も大切な事柄に至るのは簡単ではない。昔、李白が書を匡山と

いう所で読んだ。他の地に行つた時、道で老人が石に当てる斧を研いでいるのに会つた。(何をしているのかと)聞いてみると、(斧を)針にしようと思つて研いでいると言つたのに感動して、さらに努力して本を読み、ついによい評判を得た。

36 送りがなや返り点に気をつけて漢文を読む

発展問題

- 1 (1) 而 (2) 亦樂しからず(や) (3) 不_レ慍

P 101

1 (1) 「而」は、この場合は**置き字**なので読まない。

(2) 「樂」の下に返り点の一点が付いているので、「亦樂」を続けて読んで、「不」に返る。「不」は「**ず**」と**読んで否定の意を表す**。書き下し文ではひらがなで書く。この行は、「有_下朋自_下遠方_上来_上、不_二亦樂_一乎。」と返り点を付けて、「朋遠方より来たる有り、亦樂しからずや。」と読む考え方もある。

(3) 書き下し文は「慍_みみず」。漢文は「不慍」。「ず」は「不」の読みなので、漢文を書き下し文に従つて読むには、「慍」を「不」の前に読むようにし、点を付ければよい。

【現代語訳】

学んでしかるべきときに復習する、なんとうれいことではないか。友人が遠くから訪ねてくる、なんと楽しいことではないか。世の人が認めてくれなくても不平不満を抱かない、なんと人格者らしいではないか。

完成問題

- 1 (1) 1 4 2 3 (2) ず 2 知_二雪_一重_一

P 101

1 (1) まず、返り点の付いていない「遙」を読む。次に一・二点が付いてるので下の二字を読んで「見」に返る。

(2) □には「不」があてはまる。「不」は「ず」と読み、ひらがなで書く。「雪重」の二字を続けて読んで「知」に返るので、一・二点を付ける。

37 独特の言い回しに気をつけて漢文を読む

発展問題

P 103

- 1 (1) ア (2) イ (3) イ

1 (1) 「能く」は可能を表し、「能く陥すもの」は「突き通すことができるもの」、「莫きなり」は「無い」。ここは盾について述べているので、この盾を「突き通すことができる物はない」というのである。

(2) 「陥さざる」は「突き通さない(物)」。矛について言っているので「突き通さない物はない」となる。二重に否定しているので、「どんな物でも突き通す」という意味になる。

(3) 「能はざる」は「(する)ことができな」という意味。

【現代語訳】 楚の国の人に盾と矛を売っている者がいた。これ(盾)をほめて言うには、「私の盾の堅いことは、(どんな物でも)これを突き通すことができる物はない。」と。また、その矛をほめて言うには、「私の矛の鋭いことといたら、どんな物でも突き通さない物はない。」と。(すると)ある人が言うには、「(では)あなたの矛で、あなたの盾を突き通すとどうなるか。」と。その人は答えることができなかつた。

完成問題

P 103

- 1 (1) 福 (2) イ

1 (1) 「禍」と「福」が対句的に表現されていることをとらえる。

(2) 「非神聖人、莫之能分」の意味を正しくとらえる。「莫之能分」は、「これ(禍と福、利と害)を区別することができない」という意味。

【現代語訳】 そもそも禍(「わざわい」)が来るのは、人が自らこれ(禍)を生じさせたため、福が来るのも、人がそうしたのである。禍と福は出所を同じくし、利と害は隣り合っている(ので)、人格者でなければ、これらを区別することができない。

38 リズムに気をつけて漢詩を読む

【基本チエック (P104) の漢詩の大意】 題―春の明け方

春の眠りは(気持ちがよく)夜が明けたのも気づかなかつた／あちこちで鳥の声が聞こえる／(そういえば)ゆうべは風雨の音がしていた／花はどれほど散つたことやら

発展問題

P 105

- 1 (1) ウ (2) 深・心・金

1 (1) 八句(行)から成るので「律詩」、一句が五字から成るので「五言」。つまり、「五言律詩」である。

(2) 五言詩は偶数句の末字で韻を踏むのが原則。偶数句の末字を確かめると「シン」「シン」「キン」というように、「イン(in)」という音を含む漢字になっている。「簪」も「シン」と読む。

【漢詩の大意】 題―春のながめ

都は(戦いのために)破壊されてしまったが山河は元のままである／町の中にも春がやってきて草木が青々と茂っている／このような世の中に悲しみを感じて、(心むはらずの)花を見ても涙を流し／家族との別離の恨めしさを感じては(楽しいはずの)鳥のさえずりを聞いても心が落ち着かない／戦いのころは三か月にわたって続いており／そんな中で家族からの手紙はまさに万金に値する／(嘆きのあまり)白くなってしまった頭を搔くと髪はいつそう抜け落ちて／もうかんざしもさせないほどになってしまった

完成問題

P 105

- 1 (1) 承 (2) 思、千里 (3) 工

1 (1) 絶句の構成は「起承転結」。

(2) 「千里」の二字を読んでから「思」に返るので、一・二点を付ける。

(3) 三・四句に作者の思いが歌われている。

【漢詩の大意】 題―おのみそかの作

旅館のわびしい明かりのもと、独り眠れないでいる／旅人(である私)の気持ちはどうしてかますます物悲しい／故郷のことを今夜遠く離れた旅先で思う／白髪頭の私は明日になるとまた一つ年をとってしまうのだ

39 詩の表現技法

発展問題

P 107

- 1 (1) ウ (2) ア 2 (1) イ (2) イ

1 (1) 決まったりズムで詠んだ詩を「**定型詩**」という。

(2) 「ゐ・ゑ」などの昔の仮名遣い（歴史的仮名遣い）が使われていても、口語（現代の話し言葉）で書かれた詩は「**口語詩**」である。

2 (1) 「この荒々しい北風はなんだろう。」が普通の語順。つまり、**倒置法**

が用いられている。アは、野菜がフライパンでいためられる様子が「野菜たちが」「踊っている」と表現され、**擬人法**が用いられている。イは、「真っ赤なバラの花が咲いているよ。」が普通の語順で、倒置法が用いられている。ウでは、「〜のように」という表現に着目する。**直喩**が用いられている。

(2) 示されている文の末尾は「草の露」となっていて、**体言止め**が用いられている。イも、文末が「サラリーマン」となっていて、体言止めが用いられている。アは擬人法、ウは隠喩が用いられている。

完成問題

P 107

- 1 (1) ア (2) ウ

1 (1) 最後の「やうだ（ようだ）」に、歴史的仮名遣いが用いられているが、口語で書かれているので、口語詩。一行一行が決まった音数ではなく、自由なリズムで詠まれているので、自由詩。したがって、「**口語自由詩**」。

(2) この詩では、蟻にひかれていく蝶の羽の様子が「ヨット」にたとえられている。「やうだ」というたとえを表す言葉を用いているので、**直喩**。ウも、「ごとき」という言葉が使われ、「夜景」が「宝箱」にたとえられているので、直喩。アは体言止め、イは擬人法、エは隠喩が用いられている。

40 詩の鑑賞

発展問題

P 109

- 1 (1) ウ

1 (1) 「いまないておかなければ」という表現から虫の短い命を、「もう駄目だ」というふうにないている」という表現から虫のせつぱつまった様子を、作者が感じていることを読み取る。作者が虫の声をそのように聞き、「涙をさそわれる」のは、虫の生涯を自分自身に重ね合わせているからと考えられる。

完成問題

P 109

- 1 a 例かけがえ b エ

1 a 詩中に「一生にたった一度の朝」とあることに着目して、「〜のない」につながる言葉を考える。「かけがえのない」は、「この上もなく大切に、何もものにも代えられない」という意味。

b 朝顔が「一生にたった一度の朝」を迎えて花を咲かす情景をイメージしよう。朝顔が花を咲かす、その「一瞬」をとらえて「生の証」と言っているのだから、それに合うのは「輝き」である。

41 短歌の形式と決まり

発展問題

P 111

- 1 ① ア ② ウ ③ ウ 2 初（句切れ）

1 ① 三句目の「みじかければ」は六音で**字余り**。
② 「一日」「一生」の、この短歌での読み方に注意する。

③ 「寒いね」は四音。会話を表す符号のかきかっちは音数に数えない。

② 「海が恋しい。遠くの潮騒しおさいの音を数えるようにして少女となっていた、あの父母のいる家よ。」という歌。「海恋し」で切れる。大人になり、海を見る機会がなくなった現在から、海に近いところにあった故郷を思い起こしている。

完成問題

① (1) B (2) A (と) B (3) 句切れなし

P 111

① (1) Bの歌の四句目の「二つ夕焼けの」が八音で、字余り。
②・③ Aは「なほ寒し」で切れ、三句切れ。Bも「水泳ぐ」で切れ、三句切れ。Cは「な鳴きそ鳴きそ」で切れ、二句切れ。Dは句切れなし。

42 短歌の鑑賞

発展問題

① (1) ウ (2) 今年ばかりの春 (3) 例花の咲く

P 113

① (1) 短歌中に「春ゆかんとす」とある。「ゆかんとす」は、「過ぎ去ろうとしている」という意味である。「いちはず」はアヤメ科の植物で、五月頃に花を咲かせる。

② 人にとっては違うかもしれないが、「我目わがめ」、つまり自分にとっては今年限りの春の風景として見えるというのである。「今年ばかり」という表現に、作者の心情がよく表れている。

③ 季節になっていちはずの花が咲いたという、毎年繰り返す情景を歌ったものであるが、その「花が咲く」という何でもないような情景を、特別な思いでじっと見つめている作者の様子が想像できる。

完成問題

① B ② ア

P 113

① 「青春の輝きと自信」に最もふさわしい短歌を、使われている言葉に注意し、歌の情景をイメージして選ぶ。ここに挙げられた三首の短歌は、いずれも美しく豊かな髪イメージが歌われているが、「自信」に最も直接結びつくのは、「黒髪のおごりの春」とあるB。それぞれの短歌の大意は次のようになる。
A 五尺（約一メートル五センチ。誇張した表現）の髪を解いて水に放つたなら、やわらかく水に広がるでしょう。そのようにやわらかく傷つきやすい乙女心は、決して人に話すまい。

B その女性は二十歳、櫛くしにまっすぐ流れる黒髪が誇らしく感じられる、そうした青春の美しさよ。

C 解いた髪を若枝わかえにからませるような風が吹いてゆく西の方角よ。遠くに二尺（約六十センチ）に足りない、小さな美しい虹がかかっている。

② 自分は誰の味方というわけでもないはずなのに、誰かを「困らせる側」に入り、そのくせ、「目立たずいる」ことを好んだ。そうした自分の揺れ動く気持ちを詠よんでいる。イのように「集団に属さないで」いるわけではない。また、ウのように「好き嫌いの気持ちだけで行動」しているわけではない。

43 和歌の鑑賞

発展問題

① ① ウ ② エ ② ウ

P 115

① ウの「あしひきの」は、「山」を導く枕詞まくらことばである。エは結句が「秋の夕暮れ」と体言で終わっている。

アは、東の野に「かきろひ（太陽が昇る際の光）」が差すのが見えて、西の空を振り返ってみたら、月が沈もうとしていたのである。この歌は有名なので覚えておきたい。イは、「ふる」の部分が「経」と「降る」をかけ、「ながめ」の部分が「眺め」と「長雨」をかける掛詞になっている。大意は、「花が春の長雨に打たれて散っていくように、物思いにふけているうちに、私の美しさも消えうせてしまったことだ」となる。ア・ウは『万葉集』、イは『古今和歌集』、エは『新古今和歌集』に収められている。

2 設問文に「節分から立春」とあるので、冬から春に変わる頃の歌を選ぶ。アは「紅葉とともに雪の降りぬる」とあるので、秋から冬にかけての歌。イは「梅の花」「柳なびきて春雨ぞふる」とあるので春の歌。ウは「氷うちとけ春は来にけり」とあるので、春の到来の歌。

完成問題

P 115

1 (1) A 三 B ウ (2) ㊦ 鳴の飛び立つ音によって、かえって沢の静けさが強調される (27字)

1 (1) A 歌の横に記された解釈文に着目しよう。「(情趣は)感じられることだ。」の箇所には句点がある。短歌では「(あはれは)知られけり」の箇所にあたる。B 結句が「秋の夕暮れ」という体言になっている。

(2) 鳴が飛び立つ情景なのだから、聴覚でいえば、その飛び立つ音である。――線部のあとに「秋の寂しさが凝縮されている」とあることから、鳴の飛び立つ音がかえって迎りの静かさを強調することをとらえるとよい。

44 俳句の形式と決まり

発展問題

P 117

- 1 ① (季語) 桜 (季節) 春 ② (季語) 春を待つ (季節) 冬
③ (季語) 端午 (季節) 夏 ④ (季語) 秋刀魚 (季節) 秋

- 2 ① や ② かな ③ けり

1 ②は、「春を待つ」のだから、季節は冬である。③の「端午」は、五月五日の節句のこと。「五月」は旧暦で考えるので夏である。④は、「秋刀魚」という漢字に着目。

2 「や・かな・けり・ぞ・よ」などの主な切れ字は覚えておこう。

完成問題

P 117

- 1 B 2 や 3 ア

1 「颯風」は秋の季語。Aは、「雪とけて(雪解け)」で春。Bは、「露」で秋。Cは、「雷」で夏。Dは、「霰」「霜」で冬。

2 切れ字の「や」を読んだあとで間を置く。

3 ア 季語は「小春日和」。「小春日和」は、春のように暖かな、冬の晴れた日のこと。よって、季節は冬。イ 初句の「玉の如き」が六音で、字余り。ウ 「如き」はたとえを表す。小春日和を「玉(宝石)」にたとえている。

45 俳句の鑑賞

発展問題

P 119

- 1 (1) 夏草 (2) エ

1 (1) 季語は「夏草」で、季節は当然「夏」である。

(2) 夏草は、昔も今も変わらず勢いよく茂っている。昔は、そこで兵たちが「栄華や功名」を夢みて戦ったが、今は「ただ草むらとなっただけ」である。このことから、芭蕉は、人の世ははかないと感じているのである。

完成問題

P 119

- 1 イ
- 2 ア

1 作者が柔らかな日差しが降り注ぐ中で大木を見上げているという**情景をイメージ**して、適切な選択肢を選ぶ。アは「青々とした若葉に覆われた」が、春の季語である「芽ぶく」に合わない。ウの「生気が感じられない」、エの「寂しさ」は、鑑賞文の「うららかに晴れた」「生新さ」に合わない。

2 鶯が鳴く「前ぶれ」を感じさせる俳句を選ぶ。アに「鶯のけはひ興り」とある。「けはひ」は「気配」、「興り」は「起こって」という意味なので、この句が適切。

46 話し方・聞き方

発展問題

P 120

- 1 (1) イ (2) 例 自分の名前

1 (1) ここは相手の動作を敬って表現するところなので、**尊敬語**を用いるのが適切である。「おります」では謙讓語になってしまう。

(2) **電話をかけるときのエチケットとして、相手が電話に出たら、まず自分の名前を名乗ることが大事である。**

完成問題

P 121

- 1 (1) 例 集合時間がわからないので教えてください。(2) イ 2 イ

1 (1) 田中さんの話には、テニス大会の行われる場所、集合場所、持ち物など、部員がテニス大会に参加するうえで知っておかなければならない情報が含まれているが、**当日の集合時間という重要な情報が抜けてしまっている。**

(2) 田中さんの話の目的は事実を正確に伝えるということである。事実を正

確に伝えるためには、伝えたい要点が整理されていること、構成がわかりやすいことなどが大切。これは、口頭で話をする場合に限らず、手紙などで用件を伝える場合も同様のことがいえる。

2 生徒が先生に話す場合、どのような言葉遣いをすればよいのかを考える。生徒は目上の先生に敬意を表すような表現をすべきである。また、それと同時に身内である「母」のことはへりくだって表現すべきである。つまり、先生の動作は尊敬語、「母」の動作は謙讓語で表現する。手紙を書く場合も、敬語を正しく使うべきであるのはもちろんである。

47 紹介文を書く

発展問題

P 123

- 1 例 私の好きなことわざに「縁の下の力持ち」があります。

私は中学校で野球部のマネージャーをしていました。マネージャーの仕事は決して日の当たるものではありませんが、私は選手たちが全力で試合や練習に打ち込めるように一生懸命努めてきました。そんな私にとって、「縁の下の力持ち」という言葉は、まさに自分の理想の姿を言い表した、特別な言葉なのです。

1 **作文の問題では、問われていることと条件をきっちりとおさえておくことが大切である。**この問題では、自分の好きなことわざを紹介する文章を書くことが求められており、書き出し方や、自分の「体験や見聞を含めて書く」こと、文字数が条件として提示されている。

まずは紹介したいと考えることわざをいくつかメモに書き出してみよう。その中から、最も書きやすそうなものを選んで題材とする。自分の「体験や見聞を含めて書く」ことが条件とされているので、「体験や見聞」に結びつけやすいようなことわざを選ぶとよい。文章の構成は、先に選んだことわざを示し、そのあとで、関連する「体験や見聞」を紹介して、最後に、選んだ

ことわざに対する自分の感想・考えを書くという形にすると、書き手の意思が明確に伝わる文章となる。

完成問題

P 123

1 (紹介するもの) 例屋久島の自然
(本文)

例 屋久島は九州の南に位置する島です。とても豊かな自然が残されており、現在では世界遺産に登録されています。特に縄文杉とよばれる古木はとも貴重なものとされています。

屋久島の最大の魅力は、昔の自然の姿が、そのままの形で残されているところにあります。このすばらしい自然は、鹿児島県の宝であり、また全人類の宝であると思います。

完成問題

P 125

1 条件に注意して、第一段落では、紹介するものについての客観的な事実を記し、第二段落では、そのもののどういうところが魅力的なのかを説明する。

何を紹介するかについては、地元の「自然や風土、特産品、伝統行事、先人・偉人」などの中から、**自分がよく知っているものを選ぶ**ようにしよう。

あまり知らないことを選んでしまうと、第一段落でつまづくことになる。

第二段落には、自分の主観的な立場から、紹介するものの「魅力」を書くことが求められているので、**単なる事実を記した内容とならないように注意**する。

48 意見文を書く

発展問題

P 125

1 例 私は練習は量より質を重視すべきだと思う。量を重視した練習では、むだなことをだらだらと続けることになりがちだからだ。

アメリカのメジャー・リーグでは、中身の濃い練習を、短時間だけ集中して行うのが主流だという。実際、そのほうが効率のよい練

習になると思う。こうした理由で、私は、練習は量より質を重視すべきだと考える。

1 すでに出ている意見文は「練習は量よりも質を重視したほうがよい」という立場から書かれている。設問では、この意見文とは「異なる立場に立って」意見を書くことが求められているので、「練習は量よりも質を重視したほうがよい」という意見を書けばよいことになる。

意見文は読んだ人を納得させることを目的とした文章であるから、単に意見を述べるだけではなく、**主張したい意見の根拠を明確に示すことが不可欠**である。根拠を示す場合は、**自分の体験や見聞といった具体的な事例を交える**ことが望ましい。それによって、より説得力を増すことができるのである。

1 例 私は、野鳥であるハクチョウに人間が餌を与えるのは間違っていると思う。

野生の生き物は、厳しい生存競争の中で生きていく。人間が力を貸すことで、その生き物の野生の力を奪ってしまうことになるかもしれない。また、人間が特定の生き物を助けることで、生物界全体のバランスを狂わせることになってしまうかもしれない。このようなことがないように、野生の動物に餌を与えることはやめるべきだと思う。

1 野生動物であるハクチョウに餌を与えることの是非を問う問題である。もちろん、どちらの立場に立った意見を書いてもよい。ただし、書いた意見の根拠をきちんと示す必要がある。**全体の組み立てについては、先に意見を書き、あとで根拠を示してもよいし、その逆でもよい**。もちろん、右の解答例のように、最初と最後に意見を二度繰り返しても構わない。

49 感想文を書く

発展問題

P 127

1 例 写真には、詩に書かれている「なんでもお見通しだ」という言葉にぴったりのまなざしで、何かを見つめている子どもの顔が写っている。見たもの聞いたものすべてをありのままに受けとめようと
する子どもの「真っ白」な心が伝わってくるような写真だと思った。
そんな「真っ白」な心は、「どんな色」にも染まる純粋さを持っている。その純粋さを私も忘れずに持ち続けたいと思う。

1 感想文を書く問題では、例えば写真なら、そこに何が写っているのか、それはどういう状況なのか、またその写真からどういう印象を受けるかなど、**さまざまな視点に立って、想像力を働かせる**ことが大事である。

この問題では詩が添えられているので、まず詩の内容を解釈することから始めるとよい。詩の最後に「子どもの心は／真っ白だ／どんな色にも／染まってしまうぞ」とあることから、ここではどんなものも柔軟に受け入れようとする子どもの心の純粋さがテーマになっていることがわかる。したがって、こうしたテーマに沿った形で写真の被写体をとらえてみるとよい。

なお、立場をはっきりさせて書く意見文のような文章とは異なるので、なぜそう感じたのかについての根拠は必ずしも明確に示す必要はない。

完成問題

P 127

1 例 私は生まれてから十五年間、ずっと同じ土地で過ごしてきた。もちろん、家族と離れて暮らしたこともない。そのせいか、自分の家族やふるさとについて、あまり深く考えたことがなかった。この短歌は、そんな私に、ふるさとでの平凡な暮らしのよさを、ふと気づかせてくれたように思う。この短歌を読むと、家族とのちょっとした会話も、何かとても心地よく感じられてきて、今までより少し幸

せになれたような気がした。

1 設問文に「自分の体験（見聞）を含めて」という条件が示されている点を見逃さないようにしよう。短歌の内容に関連するような自分の体験や見聞を感想とともに書くというのが、本問のねらいである。

課題となっている短歌は、「なんでもない会話」や「なんでもない笑顔」が交わされる「ふるさと」の暮らしのよさを歌ったものである。**このような歌の内容に直接結びつくような体験や見聞をメモに書き出してみよう**。「なんでもない会話」などといった言葉に着目し、そこから連想できる自分の体験や見聞を洗い出してもよい。

最後に、メモに書いた体験と、その体験や歌そのものに対する自分の感想とを関連づけながら文章にまとめよう。

高校入試基礎問題 模擬テスト 1

模擬テスト 1

P 128・129

- 1
- (1) ウ
(2) エ
(3) エ
(4) ウ
(5) 例感情を理解

1 第二段落の冒頭に「コミュニケーションとは何か」とあり、それに対して「意味や感情をやりとりする行為である」「やりとりする相互性があるからこそコミュニケーションといえる」と述べられている。「やりとり」「相互性」に着目すると、ウの「仕事の内容を何度も確認し合う」が「情報のやりとり」の具体例として適切であると判断できる。アの「受け取る」「イの「日記」、エの「ラブレターを恋人に送る」はいずれも相互性がない。

2 線②の直前に「相手の歌の中の言葉を、自分の歌にアレンジして組み込む」とあるが、その言葉、つまり、**A・B両方の歌に用いられている言葉が「キーワード」である**。Aでは、二回用いられている。

3 【歌意】に着目して考える。Aは「君を一人待ち続けて：冷たくなってしまった」から、作者の孤独と、**会えなくて寂しい**という気持ちが読み取れる。Bでは、あなたが濡れたという山の水のしたたりになりたい、つまり、**側にいたかった**という気持ちが読み取れる。

4 第五段落の「コミュニケーションの日本的な形態として、和歌のやりとりがある」に着目する。**コミュニケーションが相互性のあるやりとりであることを、和歌のやりとりを具体例にして説明しているのだ**。

5 筆者は、コミュニケーションにおいてやりとりするのは「意味と感情だ」「情報を伝達するだけでなく、感情を伝え合い分かち合うこともまたコミュニケーションの重要な役割」と述べ、「したがって**感情をお互いに理**

解することを抜きにすると、トラブルのもとになる」と述べている。よって、この二語をつないで「感情を理解」と答えるとよい。「感情」は「思い」、「理解」は「伝達」などでもよい。

模擬テスト 1

P 130

- 2
- (1) エ
(2) ア
(3) ゆえに
(4) 出家人
(5) エ

2 線①は、「余の侍が調べ出して(中納言入道にお持ちしたところ)という文脈なので、主語は「余の侍」。

(2) 「決定、その太刀なれども、侍の恥辱を思うて返されたり」(「まさしく、盗まれた太刀であったが、侍が恥をかくことを思いやってお返しになったのだ」とあるので、アが正解である。

(3) 歴史的仮名遣いの「**る・ゑ・を**」は、現代仮名遣いでは「**い・え・お**」と表記する。したがって、「ゆゑに」は「ゆえに」となる。

(4) 「俗」とは「俗世間の人」という意味。対比されているのは、出家した人、「出家人」である。「出家」とは、俗世間を捨てて仏門に入り僧になること。

(5) この話は、中納言入道が秘蔵の太刀を盗まれたとき、従者が犯人を調べ出してその太刀を中納言に持っていったところ、間違ひなく盗まれた太刀だったが、盗んだ侍の恥なることを考えて「これは自分の太刀ではない」とうそをついた。その結果、何事もなく過ぎ、子孫も繁栄したという話である。つまり、この文章は、**うそをつくことも、人間らしい思いやりの心として使われてよいという趣旨**なので、「うそも方便」が適切である。

【現代語訳】 事実かどうかは知らないが、故持明院の中納言入道が、ある時、秘蔵の太刀を盗まれてしまったところ、侍の中に犯人がいることを、他の侍が調べ出して(その太刀を中納言入道に) お持ちしたところ、入道が言うには、「これは、私の太刀ではない。間

「違いだ」と言って返した。まさしくその(盗まれた)太刀であったが、(盗んだ)侍の恥を思つて(太刀を)返されたと、皆は、このことを知つていたけれども、その時は何事もなく済んだ。それゆえ、子孫も榮えているのである。俗世間の人でも、心ある人は、このようである。ましてや、出家した人は、必ず、このような心遣いがあるべきである。

模擬テスト 1

P 130・131

3 (1) ① けいしや ② おごせ ③ はあく ④ わやく

⑤ 飼育 ⑥ 警備

(2) ウ (3) イとエ (4) 仮定(形) (5) ウ

3 (1) ①「傾斜」は、かたむきのこと。②「厳」の音読みは「ゲン・ゴン」。「莊

嚴」などの熟語がある。③「把握」は、内容などをしっかり理解すること。

④「和訳」は、日本語に訳すこと。英語に訳すことは、「英訳」。

(2) 「未来」は、上の「未」が下の漢字「来」を打ち消している。ウの「非常」

も同じく、「非」が下の「常」を打ち消しているという組み立てである。ア「起

伏」は意味が対になる漢字、イ「佳作」は上の漢字が下の漢字を修飾して

いる組み立て、エ「打撃」は似た意味の漢字の組み立てである。

(3) ア「大いなる」は連体詞、イ「面白く」は形容詞「面白い」の連用形、

ウ「なる」は動詞、エ「書きやすい」は、形容詞「書きやすい」の連体形、

オ「わざわざ」は副詞である。したがって、イとエが同じ品詞である。

(4) 「たのめ」の終止形は「たのむ」。「ば」に続く形は仮定形である。

(5) 「伝えられた」は一文節。単語に分けると「伝えられ一た」となる。

「伝え」は動詞、「られ」は受け身や尊敬などを表す助動詞、「た」は過去を表す助動詞である。

模擬テスト 1

P 131

4 (例)

書き出しや段落を変えるときは、1マス空ける。

し	る	○	得	よ	て	理	た	し	る	こ	○	切	○
た	と	私	ら	う	仕	を	な	て	か	と	な	な	私
。	き	は	れ	と	事	に	け	い	ら	で	ぜ	こ	は
	の	親	る	い	を	に	れ	ま	で	、	な	と	、
	責	の	の	う	す	で	ば	す	す	周	ら	は	仕
	任	働	だ	、	る	き	、	。	。	り	、	、	事
	感	く	と	お	か	ま	お	作	私	か	仕	責	を
	の	姿	思	客	ら	せ	客	る	の	ら	事	任	す
	大	か	い	様	、	ん	様	料	家	の	へ	感	る
	切	ら	ま	か	ま	。	は	理	は	信	の	だ	う
	さ	、	す	ら	た	責	安	に	、	頼	責	と	え
	を	仕	。	の	食	任	心	責	飲	を	任	考	で
	感	事		信	べ	を	し	任	食	得	を	え	最
	じ	を		頼	に	持	て	を	店	ら	持	ま	も
	ま	す		を	来	っ	料	持	を	れ	つ	す。	大

行末の句読点は文字と同じマスに入れる。

4

- まず、三つの中から**選んだもの**を挙げ、**その理由**を書く。
- 理由を書くときは、文頭に「なぜなら」というのは「そのわけは」など、**理由を示す言葉**を入れるとわかりやすい。
- 具体的な例や体験**を入れると説得力のある文章になる。
- 原稿用紙の書き方**にしたがう。

〔採点基準〕 指定の字数に合わない↓マイナス3点
原稿用紙の書き方の間違い↓一か所マイナス2点

高校入試基礎問題 模擬テスト 2

模擬テスト 2

P 132・133

- ① (1) ウ
 (2) D
 (3) 例 一生懸命にお百度参りをしていたこと。
 (4) イ
 (5) イ

① (1) 三行あとに「母親のおどろきあまりにも強くて」とあるのに着目する。明け方、そこにいるはずのないひさしの姿を見て、**母親は、おどろきのあまり気が動転している**のである。アの「悲しみ嘆いている」、イの「困惑している」、エの「悔しがつている」は、いずれも文章中からは読み取れない。

(2) 「短いような、長いような時間」とは、ひさしが母親のあとをつけて行き、母親がお百度参りをしている姿を見ている場面で、それはDの前までである。これに対して、Dのあとは、その時間が過ぎて帰り道の場面のことなので、Dで、大きく場面が転換しているといえる。

(3) 「こうして」が指す母親の行動は、――線②の前の二段落に書かれている。具体的には、母親が、父親の病気が治るために**一生懸命お百度参りをしていたこと**をひさしは知ったのである。

(4) 明け方の、ひとり見放されたような心細さは、「帰り道ではほとんどなくなつて」いた。それは、「自分には分らないところで生きて」いる母親の「他家の人のようになってお百度参りする」姿を見たからである。「それを知らないうちのひさしに戻るわけにはいかなかった」という変化は、**母親を自分とは別の存在として見たことにより自我が目覚め、ひさしが成**

長したことを表している。

(5) この文章は**第三者の視点から描かれたもの**なので、アの「母親とひさしそれぞれの視点から」は誤り。ウは、「過去の場面のみ会話文を使用」とあるが、「どうしたの!」「達磨さんになって、待っておいで。」などは、現在の場面での会話文であるので、誤り。エ「達磨さんになって」の「達磨さん」は隠喩ではあるが、「父親の心情を象徴的に表現」したものでない、エも誤り。

模擬テスト 2

P 134

- ② (1) ア
 (2) エ
 (3) A 寶石 B 欲張らない

② (1) 「玉を得たる者」(「寶石を手に入れた者」とは、「宋人」のことである。宋人は、寶石を手に入れて子罕に献じたが、子罕は受け取らなかった。そこで宋人は「これを寶石を磨く職人に見せたところ宝石と認めたので思い切つて献じたのですよ。(なぜ受け取らないのですか)」と言つた。つまり、宋人は、**子罕がその宝石を偽物だと疑っていると思つた**のである。

(2) ―線②「以示玉人」は、書き下し文では「**以つて玉人に示すに**」と読むので、「以↓玉人↓示」の順に読むように返り点を付けるとよい。「玉人」の二字を読んで「示」に返るには、**一・二点を**使い、「玉人」の左下に一を、「示」の左下に二を入れるとよい。**送り仮名は、それぞれ、右下にカタカナで**入れる。

(3) 設問に「現代語で」書くという指示があるので、現代語訳を参考にするとよい。**子罕は、何を宝として大切にせず、どんな生き方を大切にしているのか。**「あなたは寶石を宝としている」から、「宝」とは「寶石」のことであり、「私は欲張らないことを宝としている」から、子罕が大切にしているのは「欲張らない」生き方であることがわかる。

【現代語訳】 宋人(宋の国の人)で宝石を手に入れた者がいる。これを司城しじょうの子罕しんに献上した。子罕はこれを受け取らなかった。宝石を献上した者が言うには、「これを宝石を磨く職人に見せたところ、職人は宝石と認めました。だから思い切ってこれを献上するので」と。子罕が言うには、「私は欲張らないことを宝としている。あなたは宝石を宝としているもしそれ(宝石)を私にくれたら、どちらも宝を失うことになる。人それぞれがその宝を持っているのに越したことはない。」と。
そこで宋国の老人が言うには、「子罕は宝を無視しているわけではない。宝とするものが他の人と異なっているのだ。」と。

模擬テスト 2

P 134・135

- (1) ア
(2) イ
(3) エ
(4) 工

③ (1) 「説」はごんべん。ア「沖繩諸島」↓ごんべん、イ「精密な機械」↓こめへん、ウ「経済指標」↓きへん、エ「人権の保障」↓こざとへん。

(2) 「先生」の動作なので、尊敬語を使う。ア「(お)する」は、謙讓語なので、誤りである。「(お)くなる」が尊敬語。

(3) 「あきれたように」の「た」「ように」はどちらも付属語(助動詞)なので、「あきれたように」で一文節。「の」と「を」は付属語なので、「わたしの」「ことを」は、それぞれ一文節。「みて」「いた」もそれぞれ一文節である。なお、「みていた」の「みて」と「いた」は補助の関係。

(4) 「避けます」の「避け」は、動詞「避ける」の活用した形。動詞の活用形の見分け方は、「ナイ」をつけて、その前の音で判断する。

「避けエーナイ」となると、「ナイ」の前の音がエ段なので、下一段活用。また、活用形は、接続する語によって判断する。「ない・う・よう」に続く動詞は、未然形。「ます・た・て」に続く動詞は連用形なので、「避けます」の「避け」は連用形である。

模擬テスト 2

P 135

④ 書き出しや段落を変えるときは、1マス空ける。

か	て	う	と	と	が	そ	○	20	発	は	持	話	○
ら	こ	え	は	異	と	れ	私	%	表	約	つ	を	資
だ	そ	で	、	な	も	わ	、	ら	る	%	と	ち	か
。	意	重	お	る	大	か	自	ず	の	い	が	ん	ら
	義	要	互	意	切	り	分	で	が	る	で	と	、
	の	な	い	見	切	や	の	あ	得	の	き	聞	友
	あ	こ	に	や	だ	や	の	あ	得	の	き	聞	友
	る	と	相	考	と	す	意	る	意	に	る	い	達
	話	で	手	え	思	く	見	と	だ	対	と	て	と
	し	あ	を	を	う	発	を	わ	と	し	思	自	話
	合	り	理	発	。	表	持	か	思	て	っ	分	し
	い	、	解	表	特	す	る	う	、	て	の	考	う
	に	そ	し	す	に	る	た	。	人	そ	い	考	う
	な	う	合	る	相	こ	ら	は	れ	る	え	と	
	る	し	う	こ	手	と	、	、	を	人	を	き	

行末の句読点は文字と同じマスに入れる。

④

- まず、資料を見て**気づいたこと**を書く。例えば、「Iは、『当てはまる』どころかといえは当てはまるが90%以上。一方、IIは約50%である。」など。
- 次に、**段落を変えて**、気づいたことについての自分の考えや意見を書く。
- 原稿用紙の書き方にしたがう。

【採点基準】

- 字数や段落の指定に合わない↓マイナス3点
- 原稿用紙の書き方の間違い↓一か所マイナス2点
- 漢字や仮名遣いの間違い↓一つマイナス1点